

# 中世菊池一族関連遺跡群 確認調査概要報告書

「菊之城跡」

「守山城跡及び内裏尾」

「隈府城下遺跡」

2020年

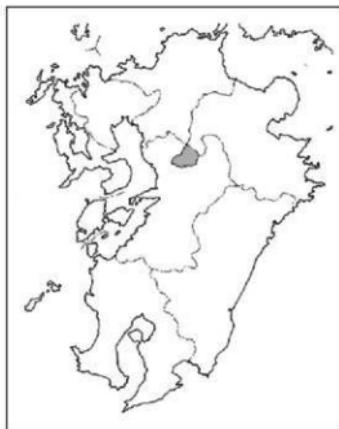
菊池市教育委員会

# 中世菊池一族関連遺跡群 確認調査概要報告書

「菊之城跡」

「守山城跡及び内裏尾」

「隈府城下遺跡」



2020年  
菊池市教育委員会



## 序 文

菊池市は熊本県北部に位置し、阿蘇外輪山を源とする1級河川菊池川とその支流合志川、迫間川によって、豊かな自然環境が育まれています。その歴史は古く、南北朝時代には南朝方に忠節を尽くして戦い、その名を謳われた菊池一族の本拠として知られています。また文教の地としても知られ、多くのすぐれた学者や教育家を輩出してきました。

本書は中世菊池一族の城館と考えられる菊之城跡、守山城跡及び内裏尾、並びに隈府城下遺跡をはじめとする関連遺跡の確認調査等の概要報告書です。菊之城跡は初代則隆から十六代武政の代まで、守山城跡はそれ以降の菊池一族の本城であったと伝承されてきました。本書は菊池市教育委員会が両遺跡の実態解明と歴史的価値付けを目的とした確認調査、周囲の関連遺跡等の踏査等を実施し、その考古学的成果を概要報告書としてまとめたものです。本書が文化財保護と学術研究の推進に寄与できましたら幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の作成にいたるまでご協力をいただきました多くの方々に、心から感謝申し上げます。

令和2年3月

菊池市教育委員会

教育長 渡 邦 和 博

## 例　　言

1. 本書は、中世菊池一族関連遺跡群の国指定を目的として実施した、確認調査等の概要報告書である。
2. 確認調査等を実施したのは、熊本県菊池市北宮に所在する菊之城跡、隈府に所在する守山城跡及び内裏尾、隈府城下遺跡等関連遺跡である。菊池市教育委員会が実施したものである。
3. 菊之城跡の確認調査は平成23・27年度におこなわれたもので、その他の遺跡については適宜実施したものである。整理作業は平成29年度から令和元年度にかけておこなった。
4. 遺構は調査者が実測をおこなった。現場写真は調査者が撮影をおこなった。文献調査は熊本大学文学部附属永青文庫研究センター稻葉継陽教授の監修下で熊本大学院生、並びに菊池市歴史教育専門員成富なつみ、鷲崎有紀がおこなった。菊之城跡測量委託業務は㈱ダイチプランに、菊之城跡確認調査出土遺物写真撮影業務は㈱理蔵文化財サポートシステム、㈱九州文化財研究所に、菊之城跡確認調査出土遺物実測業務は㈱理蔵文化財サポートシステム、㈱九州文化財研究所、㈱有明測量開発社に、菊之城跡水準点測量業務は㈱有明測量開発社に、菊之城跡出土炭化物年代測定は㈱古環境研究所に、菊之城跡・守山城跡及び内裏尾空中レーザー計測は㈱ワールドコンサルタントに、隈府城下遺跡遺構実測業務は㈱有明測量開発社にそれぞれ委託した。
5. 本書の図面は基本的に遺物は土器を1／3で記載している。
6. 本書に掲載した図版は、菊池市教育委員会において作成したものを中心用いたが、一部で既知の文献、絵図、調査研究成果を引用、参照した。また熊本県教育庁文化課が実施した確認調査のデータの提供を受けた。
7. 出土遺物および実測図などは、菊池市教育委員会が整理保管している。

## 本文目次

### 序文

### 例言

### 第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査の経緯 .....	6
第2節 調査の経過(平成23～30年度調査) .....	6
第3節 調査の組織 .....	7

### 第Ⅱ章 環境

第1節 地理的環境 .....	8
第2節 歴史的環境 .....	8

### 第Ⅲ章 調査の成果 .....

第1節 菊之城跡 平成23年度の確認調査成果	
【トレンチ1】 .....	11
【トレンチ2】 .....	12
【トレンチ3】 .....	14
第2節 菊之城跡 平成27年度の確認調査成果	
【トレンチ4】 .....	16
第3節 菊之城跡確認調査の考察 .....	16
第4節 菊之城跡周辺の踏査等の成果 .....	32
第5節 守山城跡及び隈府の町並み .....	33
第6節 菊之城跡・守山城跡の空中レーザー測量 .....	36
第7節 菊之城跡確認調査出土炭化物測定 .....	36
第8節 文献調査の成果 .....	37
第Ⅳ章 総括 .....	40
写真図版 .....	43

# 第Ⅰ章 序 説

## 第1節 調査の経緯

菊之城跡は菊池市北宮に所在する。中世の菊池一族に関連する所謂「菊池十八外城」のひとつとして、昭和41年に市指定史跡に指定されており、その後は大きく状況を変えずに現在にいたっている。菊之城跡が関連遺跡の中でも特に重要視されているのは、一族が最初に構えた居館であると伝えられ、本拠移転後も外城のひとつにあげられていることである。

平成24年1月24日、菊之池区長会長・深川区長より「菊之城跡（館）跡地の試掘・調査実施についてのお願い」により調査・整備等の要望があった。これを受けた菊池市教育委員会では、3月15日～27日に菊之城跡主郭部分と想定されている筆に、トレンチ3基を設定し実態調査を目的とした確認調査を実施した。いずれのトレンチも柱穴、土坑等の遺構を確認し、遺物包含層は概ね0.5mの厚さで良好に残り、13世紀代の土師器壺、小皿を中心に多量に出土したことから、由来のとおり城があったことがうかがえるが、ここだけでの調査では情報量が少なく、全体像を把握するには至らなかった。

そのため、翌24年度も引き続き確認調査を実施する必要があると判断し、9月議会で補正予算を計上して対応する計画であった。平成24年10月9日、県文化課から菊池一族の発祥の地として国指定を目指すことを、さらに10月20日、單一の遺跡だけではなく、菊池一族の遺跡を包括して広域の活用に取り組むよう提案され、市として国指定を目指していく方針を固めた。

平成26年2月27日に史跡菊之城跡現地指導・事前準備調査検討委員会を開催し、文化庁近江調査官をはじめ熊本大学文学部附属永青文庫甲元研究センター長（役職当時）ら有識者から、今後の方針について提言をいただき、平成26年度から正式に菊池市史跡調査検討委員会を発足した。菊之城跡とその後の本城と伝えられている守山城跡及び内裏尾を核とした、中世菊池一族関連遺跡を包括的な遺跡群としてとらえるようにとの委員会からの指導により、平成27年度に現地の確認調査の実施をはじめ、現地踏査、文献調査、測量調査等の実施、その他開発事業に伴う確認調査の結果も参考にし、遺跡の実態解明に努めた。

## 第2節 調査の経過（平成23～30年度調査）

- 平成24年3月15～27日 菊之城跡確認調査実施。主郭推定箇所にトレンチ3基設定。土師器、輸入陶磁器等、柱穴、土坑等を確認。
- 平成26年2月27日 史跡菊之城跡現地指導・事前準備調査検討委員会を開催。
- 平成26～27年度 文献史料調査。中世文書、近世の永青文庫中より菊池一族、関連城館の抽出。
- 平成27年3月1日 第1回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
- 平成27年9月 守山城跡土堀実測調査。
- 平成27年12月1・2・17日 菊之城跡北側確認調査実施。城郭推定域の北側にトレンチ1基設定。土師器、磁器等、時期不明の溝状遺構を確認。
- 平成28年3月10日 第2回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
- 平成28年4月11・12・18・19日 守山城跡直下の隈府城下道路確認調査の実施。溝状遺構、ピット、井戸跡の検出。
- 平成28年9月27日 航空レーザ測量により菊之城跡、守山城跡周辺の地形の図化。
- 平成29年3月10日 第3回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
- 平成29年10月30日 菊之城跡の対岸、赤星舟着場推定地踏査。造成された河岸に加工された石材確認。地元区民の話によるところ、昔は舟着場があったと伝えられるが、石材は河岸造成をした際に移動したとのことである。
- 平成29年12月22日、平成30年2月20～22日、3月13・14日 別事業に伴い菊之城跡北西側一帯の確認調査の実施。掘立柱建物跡、ピット、土坑、礎石面等を検出し、土

	土師器、須恵器、輸入陶磁器等が出土。菊之城跡北側一帯には古代～中世の遺跡が存在することが判明。
平成30年3月22日	第4回菊池市史跡調査検討委員会を開催。
平成30年5月16日	菊之城跡の対岸、赤星舟着場推定地踏査。川港へ通じる1～6番までの“くんば”と呼ばれる小路の確認。港の確認はできず。
平成30年12月17・18日	深川周辺踏査。土師器、輸入陶器表探。
平成30年12月25日	県府院馬場道路確認調査。客土除去後に井戸跡確認。
平成31年1月8日	深川周辺踏査。古池地名調査。井戸確認。
平成31年1月23日	深川周辺確認調査。畑中の礎面もしくは礎石の存在の有無を調査。
平成31年3月7日	菊池市文化財保護委員会坂口会長と共に深川周辺踏査。舟つなぎの伝承がある古木等確認。土師器、輸入陶磁器表探。
平成31年3月14日	第5回菊池市史跡調査検討委員会を開催。

### 第3節 調査の組織

調査主体 菊池市教育委員会

調査責任者 倉原 久義（菊池市教育長）平成22年7月8日～平成26年7月7日

原田 和幸（菊池市教育長）平成26年7月8日～平成30年7月7日

渡邊 和博（菊池市教育長）平成30年7月8日～

調査範囲 権川 健治（生涯学習課長）平成23年度

原本 裕之（生涯学習課長）平成24・25年度

田窓 晴雄（生涯学習課長）平成26・27年度

簽原 猛（生涯学習課長）平成28～30年度

山本美千代（生涯学習課長）平成31年度～

調査担当 板本憲昭、西住欣一郎、北原美和子、阿南 亨（生涯学習課）

調査協力者 横宜田佳男（文化庁）、太田幸博（元熊本県教育委員会）、岡本真也（熊本県教育委員会）、美濃口雅朗（熊本市教育委員会）、永野弘明・西村沙保理・坂井泰雄（熊本大学院生）、高山敏朗・堤 克彦・坂口金次郎・角田孝信・桶田たつえ・橋本以蔵（菊池市）、成富なつみ・鷺崎有紀・中尾亮照・茨木浩一・土野貴重・久保田陽香・西坂知絵・田中 晚（菊池市教育委員会）

史跡菊之城跡現地指導・事前準備調査検討委員会、菊池市史跡調査検討委員会 委員

名 前	所 属	専 門 分 野	年 度	備 考
甲元 滉之	有識者	熊本大学名誉教授	考古学	平成25年度～ 現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
北野 隆	有識者	建築学	平成25年度～	現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
山尾 敏孝	有識者	土木工学	平成25年度～	現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
植葉 勝陽	有識者	熊本大学文学部歴史学科教授	歴史学(中世)	平成25年度～ 現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
小畠 弘己	有識者	熊本大学文学部歴史学科教授	考古学	平成25年度～ 現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
鈴木 寛之	有識者	熊本大学文学部総合人間科学准教授	民俗学	平成25年度～ 現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
小野 正敏	人間文化研究機構理事	考古学	平成25年度～	現地指導・事前準備調査検討委員会
坂口 金次郎	有識者	菊池市文化財保護委員会会長	平成25年度～	現地指導・事前準備調査検討委員会 宅野調査検討委員
荒木 文代	有識者	菊池市文化財保護委員	平成30年度～	史跡調査検討委員
松宮 英紀	地元代表	北宮区長	平成27年度	史跡調査検討委員
石岡 博人	地元代表	北宮区長	平成28・29年度	史跡調査検討委員
北村 克己	地元代表	北宮区長	平成30年度～	史跡調査検討委員
高山 由則	地元代表	深川区長	平成27年度	史跡調査検討委員
富田 恭一	地元代表	深川区長 菊之池区長会会長(29年度)	平成28・29年度	史跡調査検討委員
松永 信也	地元代表	深川区長	平成30年度～	史跡調査検討委員
光永 明徳	地元代表	菊之池地区会会長 上西寺区長	平成27年度	史跡調査検討委員
宮本 勝一	地元代表	菊之池地区会会長 南吉岡区長	平成28年度	史跡調査検討委員
高山 孝雄	地元代表	菊之池地区会会長 神来区長	平成30年度～	史跡調査検討委員
坂本 榮	地元代表	菊池神社宮司	平成27～28年度	史跡調査検討委員
戸高 八徳	地元代表	菊池神社宮司	平成29年度～	史跡調査検討委員
近江 俊秀	有識者	文化庁記念物課	埋蔵文化財(中古期)	平成25年度～ アドバイザー
		熊本県教育委員会事務局教育施設文化課		平成25年度～

\*役職は平成30年度の時点。小野正敏氏のみは平成25年度の時点の役職。

## 第Ⅱ章 環 境

### 第1節 地理的環境

まず菊之城跡、守山城跡の所在する菊池市の地理的環境について述べてみたい。菊池市は、九州の中部熊本県の北部に位置し、東に阿蘇郡、西に鹿児島郡と接し、北に大分県と県境を接する。平成17年3月に旧菊池市、七城町、泗水町、旭志村の4市町村が合併して現在に至る。市の面積の大半は山地が占め、起伏の激しい北部の八ヶ岳連山と、なだらかな裾野を持つ東部の鞍岳につらなる山々は標高が1000mを測り、南西部に向かってゆるやかに傾斜していき、標高400~100mの丘陵地が広がる。菊池を流れる主な河川は菊池川、迫間川、合志川である。ともに多くの支流を伴いながら西進し、阿蘇山の大爆発で形成された阿蘇溶結凝灰岩（火碎流堆積物）を侵食して流域に平野部を形成する。

### 第2節 歴史的環境

#### 【旧石器時代・縄文時代】

旧石器時代、菊池川流域の伊野遺跡、原遺跡、細水地区では数点のナイフ形石器、長野地区では黒曜石製の尖頭器、鞍岳山麓では馬糞塚遺跡から石棺、湯舟地区から尖頭器が採取されている。

縄文時代後期から晩期は、平野部や台地に大規模な生活拠点が出現する。菊池川流域の平野に天祇遺跡、花房台地上に万太郎遺跡、木槻子遺跡群、台地の南に三万田東原遺跡、合志川をはさんだ南の丘陵に伊坂遺跡群などが所在する。三万田東原遺跡は、昭和6年に県内の考古学研究の中心的人物であった坂本経堯氏によつてトレーナー調査がおこなわれた、住居址、多量の土偶が確認された熊本を代表する縄文時代の遺跡である。

#### 【弥生時代】

菊池川上流域には、菊池市に小野崎遺跡、うてな遺跡、山鹿市に方保田東原遺跡が所在し、台地上には弥生時代後半に大規模な環濠集落が営まれてきたことがわかる。その他平野部には西寺遺跡、外園遺跡、合志川流域の平野部に藤巻遺跡、平町遺跡などがあげられる。外園遺跡、うてな遺跡からは、中国の新代（9~23年）に鋳造された古銭貨泉が出土している。

#### 【古墳時代】

合志川流域には久米若宮古墳など5世紀代の古墳群、合志川支流の塙浸川流域には大陸の様相を見てとれる5世紀代の古墳群、菊池川左岸の花房台地には木槻子（フタツカサン）古墳、木槻子高塚古墳などの6世紀前半代の古墳、菊池川右岸には袈裟尾高塚古墳など6世紀中ごろの小古墳群が所在し、流域ごとの古墳の変遷をみてとることができる。

#### 【古代】

天智2（663）年の白村江の戦いの後、配置された城のひとつが鞠智城（くじじょう）であると考えられる。大化の改新以降の郡国制の下、菊池郡と皮石郡、後に皮石郡から分離した山本郡の一部が現在の菊池にあたり、菊池郡は菊池と七城にまたがる一帯、皮石郡は現在の旭志と泗水、山本郡は現在の泗水の西部と想定される。菊池郡衙は西寺、合志郡衙は泗水町田島と住吉に所在していたと考えられる。花房台地上の万太郎遺跡、医者どん坂遺跡では、古代官道が敷設されていたことも判明している。

#### 【中世～近代】

中世菊池一族は蒙古襲来時には国防に務め、南北朝時代は南朝方の懐良親王を擁し、九州の南朝勢力の中心であった。本城と伝えられる守山城を中心に十八外城と呼ばれている支城群が知られている他、隈府土井ノ外遺跡で14世紀後半~15世紀前半の館跡が確認され、当時から隈府の街並みが形成されていたことが推測される他、周辺での確認調査等も進んでいる。また菊池市南部は合志一族の勢力圏であり、南北朝期には宮

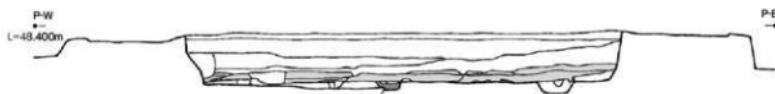
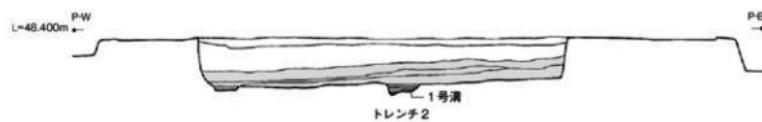
方、武家方が争っていた。

菊池一族は戦国時代後半には途絶え、菊池は細川氏の肥後藩政下、隈府が在町として栄えたが、江戸時代には地域の人々により、一族に関する記録は伝承され、中世の城の所在地を比定することもできる。

近代、花房台地上に約150haの面積に大刀洗陸軍飛行学校の花房分教所が建設されていた。戦後の開拓でも利用された給水塔をはじめ、兵舎や弾薬庫、格納庫の外壁など当時の建造物群が現在ものくる。



第1図 中世菊池一族関連遺跡群位置図



第2図 菊之城跡トレーンチ配置図・土層断面図

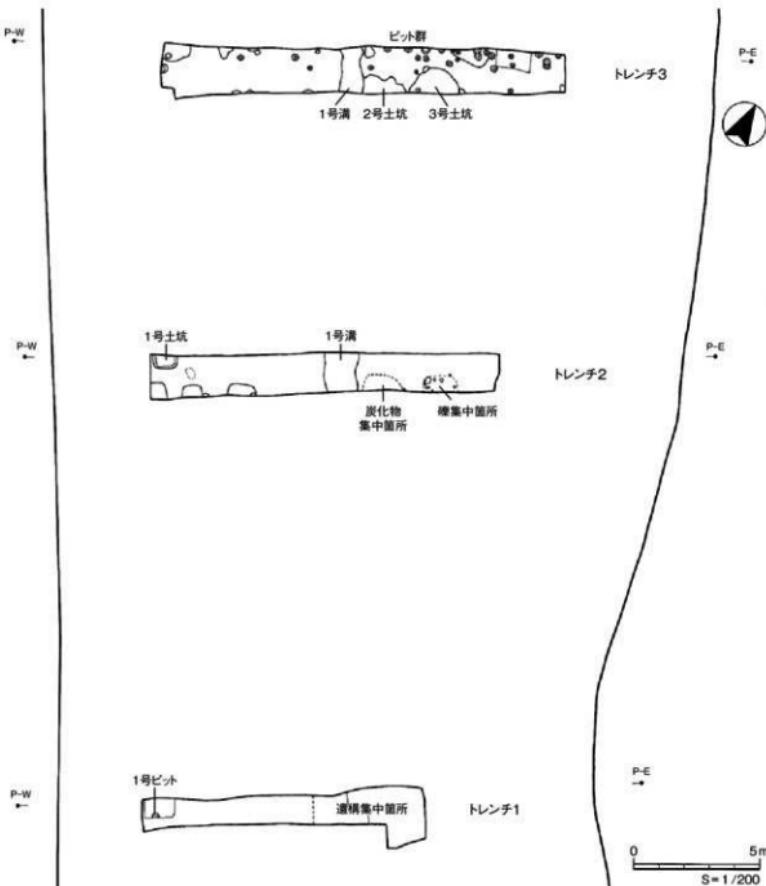
## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 菊之城跡 平成23年度の確認調査成果

平成24年3月7日～27日にかけて菊池市北宮203～205の確認調査を実施した。菊之城の主郭部分と推測されている筆の調査をおこなうことにより、城館の有無、状況等を把握することを目的とする。重機、人力によりトレンチ掘削をおこなった。トレンチは南から1～3とする。

#### 【トレンチ1】

菊之城跡記念碑のすぐ北側に設定した。I層は厚さ0.7～0.9mの表土と客土であり、分層しがたい。II層は黒褐色土層。古代から中世の遺物包含層であり、4層に細分した。II-1層は厚さ0.4mを測り、10～20cmの大の礫と土師器小片を多量に含む。II-2層は厚さ0.2～0.3mを測り、青灰色の泥炭化物を多く含む。土師器



第3図 菊之城跡トレンチ1～3遺構配置図

完形品を多く含む。II-3層はIII層に似る。II-4層は厚さ0.2~0.3mを測る。トレンチの中央部から北側にかけてII-1、2層を覆うように検出され、多量の土器が集中して出土した。III層は黄褐色粘質土のアホヤ火山灰二次堆積相当層で、地山である。トレンチ拡幅部は粗い砂質土である。

地表面から約1.5m掘り下げた箇所から遺構検出可能な面を確認したが、トレンチ全域においてII-1、2層の遺物包含層が覆い、明確な遺構は確認できなかった。

II層の遺物包含層から土師器壺、小皿が多量に出土している。壺は口径が12~13cm代の一群、口径が11~12cm代の一群に大別できる。いずれも口縁が広がる個体、広がらない個体、外反する個体が混在する。この他、口径が14cm以上で口縁が広がる大壺ととらえられる個体もある程度存在する。小皿は口径7cm後半~9cm代におおむね収まり、立ち上がりがはっきりする個体、はっきりしない個体が混在する。一部口径が9cmを越え、非常に浅く立ち上がりがはっきりしない一群が存在する。穿孔を有す小皿、灯明皿も少量出土した。壺、小皿は見込みの渦状の凹凸をナデ消すものが大半である。いずれも底部切り離し技法は糸切りで、板状圧痕、指頭押圧痕がみとめられる。少量であるが白磁碗片、龍泉窯系青磁碗、陶質系擂鉢片、須恵器片、瓦器碗が出土している。

遺物集中箇所（II-4層）から出土した土器は土師器壺、小皿が主体である。壺は口径が13cmを越え、口縁があまり広がらない一群、口径が12cm代で口縁が広がる個体、広がらない個体、外反する個体が混在する一群、口径が11~12cm代のやや小型の一群に大別できる。口径が14cm以上で口縁が広がる大壺ととらえられる個体も少量存在する。小皿は7cm後半~8cm代の一群と、それ以下の小型の一群に大別できる。壺、小皿とともに非常に浅い個体、立ち上がりがはっきりする個体、はっきりしない個体が混在し、見込みは渦状の凹凸をナデ消すものが大半である。底部切り離し技法は糸切りで、板状圧痕、指頭押圧痕がみとめられる。

#### ピット1

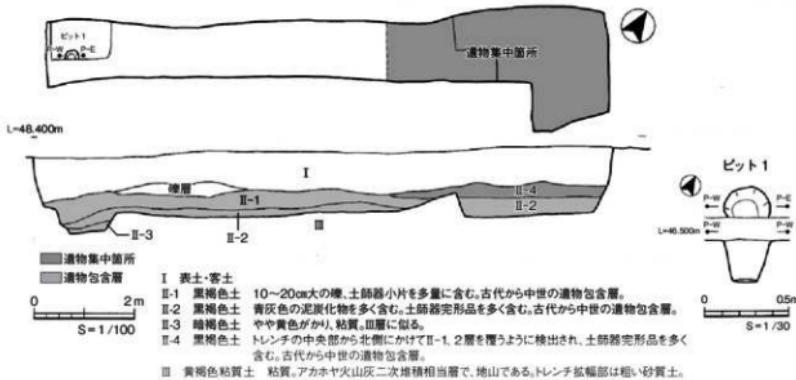
トレンチ南西端で1基検出した。平面は円形を呈し、径0.25m、深さ0.26mを測る。

#### 遺物集中箇所

トレンチの中央部から北側にかけてII-1、2層を覆うように検出され、土師器壺、小皿の完形品を多量に含む。厚さ0.3mを測る。土器溜りではないかと思われたが、明確に遺構として認識しがたい。

#### 【トレンチ2】

中央部に設定した。I層は厚さ0.2mの表土、客土。II層は厚さ0.5~0.9mの暗褐色土層。III層はにぶい褐



第4図 トレンチ1 平面図・土層断面図 ピット1平面図・断面図

色土層。古代から中世の遺物包含層で2層に細分した。III-1層は厚さ0.3~0.4mを測り、粘質。3~5cmの大の小礫を含み、土師器、白磁、青磁を少量含む。III-2層は厚さ0.2mを測り、粘質。III-1層に比べて出土遺物片が大きい。IV層は厚さ0.2~0.4mの暗褐色土層。3~5cm前後の小礫、青灰色の泥炭化物を含み、土師器、青磁、白磁を含む。古代から中世の遺物包含層である。V層は黄褐色粘質土のアカホヤ火山灰二次堆積相当層で地山である。

IV層下面で遺構検出を試みたところ、トレント南西端で土坑（1号土坑）、中央部で溝状遺構（1号溝）を検出した。さらに1号溝の北東側で約1.7mの範囲で炭化物が集中する箇所（炭化物集中箇所）、礫集中箇所を検出した。

II~IV層の遺物包含層から主に土師器片、小皿が出土している。見込みはナデにより渦状の凹凸を消すものが大半である。底部切り離し技法は糸切りで、板状圧痕、指頭押圧痕がみとめられる。少量であるが白磁碗片、龍泉窯系青磁碗片、同安窯系青磁碗片、陶器片、須恵器片、磁器染付碗片、遺構検出面上から弥生土器甕片が1点出土している。

### 1号土坑

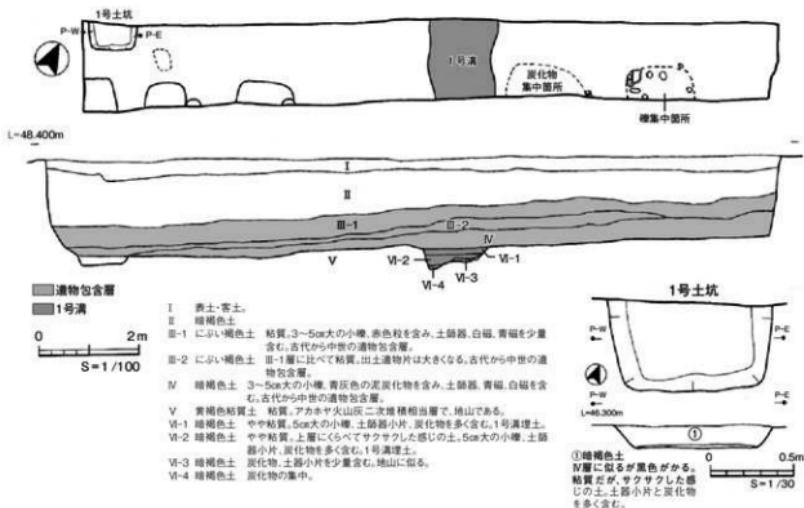
方形を呈し、北東⇒南西軸0.9m、深さ0.12mを測る。埋土は暗褐色土でV層に似るが、黒色がかり、粘質であるがサクサクした感じの土である。土師器小片、炭化物を多く含む。

### 1号溝

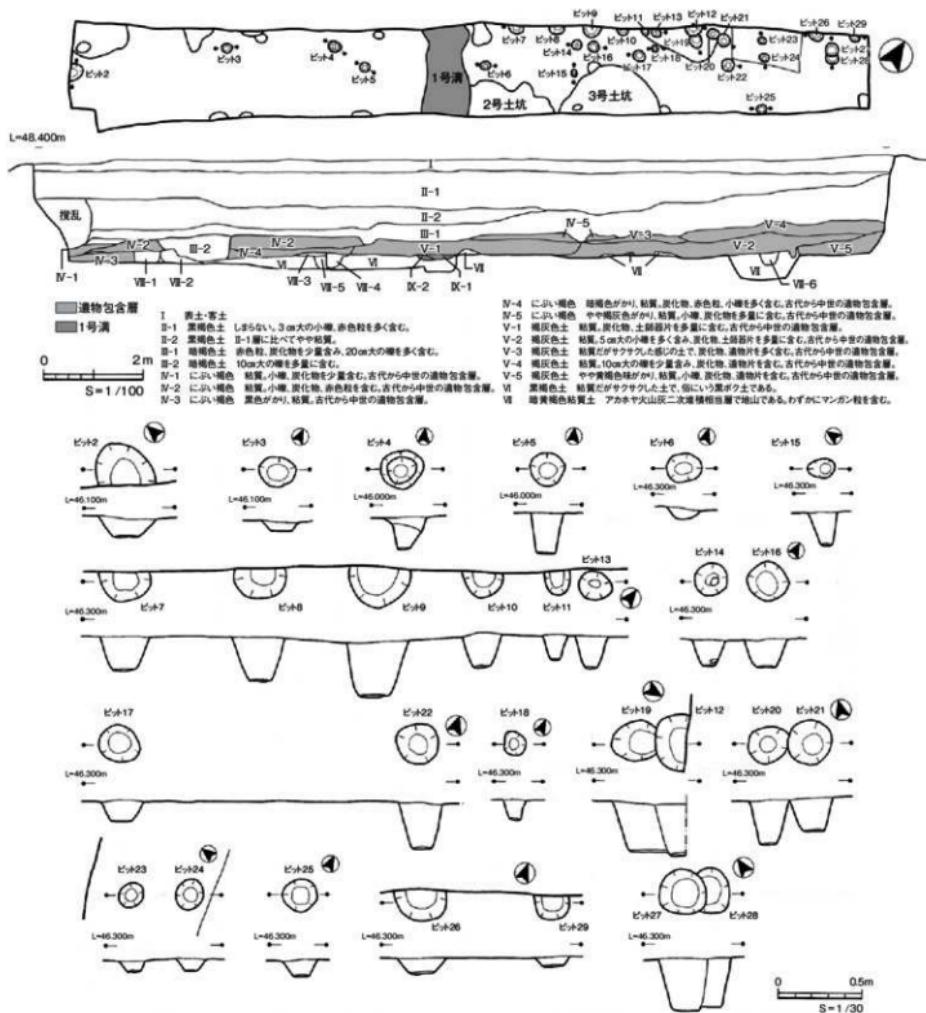
北西⇒南東方向に伸び、幅1.2m、深さ0.3~0.4mを測る。埋土は暗褐色土で、粘質であるがサクサクした感じの土である。上層に5cmの大の礫を多く含む。土師器小片と炭化物を含み、最深部に炭化物が集中している。トレント3からも同一遺構が検出されている。

### 炭化物集中箇所

1号溝の北東側に位置し、炭化物が約1.7mの範囲に集中する。



第5図 トレント2平面図・土層断面図 1号土坑平面図・断面図



第6図 トレンチ3 平面図・土層断面図 ピット平面図・断面図

#### 発掘集中箇所

炭化物集中箇所の北東に位置し、20cm大の礫が約1.4mの範囲内で集中する。

#### 【トレンチ3】

最北端に設定した。I層は厚さ0.2mの表土・客土。II層は黒褐色土層で2層に細分した。II-1層は厚さ0.3~0.8m。しまらない。3cm大の小礫、赤色粒を多く含む。II-2層は厚さ0.3~0.6m。トレンチ中央部ま

でしか存在しない。II-1層に比べてやや粘質。III層は暗褐色土で2層に細分した。III-1層は厚さ0.2~0.9m。赤色粒、炭化物を少量含み、20cm大の礫を多く含む。III-2層は10cm大の礫を多量に含む。IV層ははぶい褐色で、トレンチ西側から中央部に存在し、古代から中世の遺物包含層である。部分的に5層に細分した。IV-1層はトレンチ西端で厚さ0.2mを測る。粘質。小礫、炭化物を少量含む。IV-2層は厚さ0.3mを測る。粘質。小礫、炭化物、赤色粒を含む。IV-3層は厚さ0.2~0.3mを測り、黒色がかり、粘質。IV-4層は厚さ0.2mを測る。暗褐色がかり、粘質。炭化物、赤色粒、小礫を多く含む。IV-5層はトレンチ中央部で厚さ0.2mを測る。やや褐灰色がかり、粘質。小礫、炭化物を多量に含む。V層は褐灰色土で、トレンチ中央部から東側に存在し、古代から中世の遺物包含層である。5層に細分した。V-1層は厚さ0.3mを測る。粘質。炭化物、土師器片を多量に含む。V-2層は厚さ0.3~0.4mを測る。粘質。5cm大の小礫を多く含み、炭化物、土師器片を多量に含む。V-3層は厚さ0.2mを測る。粘質だがサクサクした感じの土で、炭化物、遺物片を多く含む。V-4層は厚さ0.25mを測る。粘質。10cm大の礫を少量含み、炭化物、遺物片を含む。V-5層はトレンチ北東側にしか存在せず、厚さ0.25~0.4mを測る。やや黄褐色味がかり、粘質。小礫、炭化物、遺物片を含む。VI層は黒褐色土で粘質だがサクサクした土で、俗にいう黒ボク土である。VII層は暗黃褐色粘質土で、アカホヤ火山灰二次堆積相当層で地山である。わずかにマンガン鉱を含む。

トレンチ南西側から中央部にかけてはIV-3層、VI層下面（地表面から20~22m）、中央部から北東側にかけてはV-1層、V-2層、V-5層下面（地表面から1.9mの深さ）で遺構検出を試みたところ、中央部でトレンチ2でも検出された1号溝の延長と想定される溝状遺構。1号溝のすぐ北東側で不整形な土坑と、円形形状の土坑らしき遺構、トレンチ全体からピットを多く検出した。遺構の掘り下げは、1号溝とピット数基を抽出しておこなった。

III~V層の遺物包含層から主に土師器坏、小皿が出土している。坏は11~12cm代におおむね収まる。口縁が内湾する個体が見受けられる。坏は見込みがナデにより渦状の凹凸を消すものが大半であるが、一部に渦状の凹凸を残す個体が見受けられる。いずれも底部切り離し技法は糸切りで、板状压痕、指頭押压痕がみとめられる。少量であるが白磁碗底部片、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗片、陶器片が出土している。

## 2号土坑

不整形を呈す。北東⇒南東方向の長軸1.7mを測る。

## 3号土坑

遺構の半分がトレンチ南東側に延びる。検出では半円形であるが円形を呈すものと思われ、東西検出長2.1mを測る。

## 1号溝

南北方向に幅0.7~0.9m、深さ0.1mを測る。埋土はやや褐色がかったサクサクした暗褐色土で、一部黒色の泥炭層である。V-1層に似る（IV-1、2層）。炭化物、土師器片を含み、トレンチ2の1号溝と同一と考えられる。

## ピット群

トレンチ全体でピットが確認されたが、特に1号溝の北側にかけてピット群が形成されている。27基を掘り下げた、そのうち18基から遺物が出土した。いずれも中世の土師器小片であった。ピットの平面は円形を呈し、径は0.12~0.2mと、0.25~0.3mのふたつに分類できる。前者の深さは0.1~0.2m、後者は0.2~0.3mと浅い。検出した限りでは、掘立柱建物を構成する柱穴とは考えにくい。

## 第2節 菊之城跡 平成27年度の確認調査成果

平成27年12月1・2日、17日に、菊之城跡と推定されている範囲の北西側の筆である菊池市北宮229の確

認調査を実施した。主郭部分と推測されている筆の北西側に、堀とおぼしき一段低い区割りが認められるため、その外側の筆に確認調査を入れることにより、堀の立ち上がり部分と屋敷の範囲を確認することを目的とする。人力により幅0.8m、長さ5.8m、深さ2.0mのトレンチ掘削をおこなった。

#### 【トレンチ4】

調査時は堀の立ち上がり部分が確認できるのではないかと思われたが、地表から約0.5mは水田の表土、床土、埋土であり、その下からは検出面での幅4.5mの北西⇒南東方向の溝状造構がトレンチのはば全面にわたり検出された。底部幅は2.0m、深さは1.2mを測る。埋土中に5cm～人頭大の河原石が大量にみとめられる。この溝状造構がそのまま延びるのであれば、筆全面におよぶ規模の大きなものと考えられるが、造成された時期や性格は不明である。

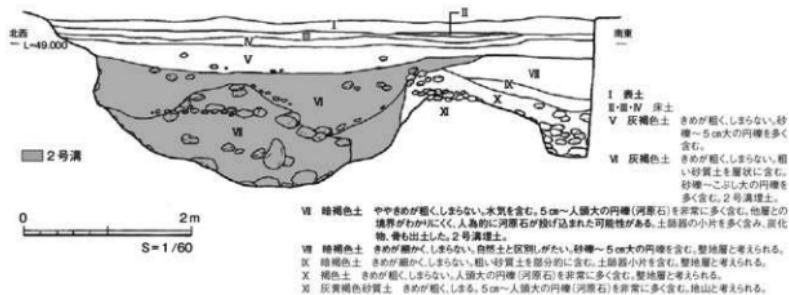
調査区の現状は、北側に向かって段丘状に高くなっている、溝状造構の北西側立ち上がり付近では表土の直下から地山と思われる黄褐色砂質土がみとめられるが、南東側立ち上がり付近では約0.9mの厚さの客土の下から造構が掘りこまれていることから、南東側の黄褐色砂質土層が削平を受けていないと想定すると、現地形は北から南に傾斜しており、調査区南側は客土によって現地形に成形されていると想定される。この高低差が自然なものか人為的なもののかは、判断することはできないが、客土によって地形は造成されているものと推測される。

造構内埋土のIV、V層から土師器、須恵器、その他青磁、白磁、天目茶碗、風炉（？）、さらに骨、微量の炭化物が少量出土した。13世紀代と推測される青磁、15世紀代と推測される白磁、さらに15世紀以降と推測される風炉が認められ、土師器は古代から中世にかけてのものが造構中に混在している。

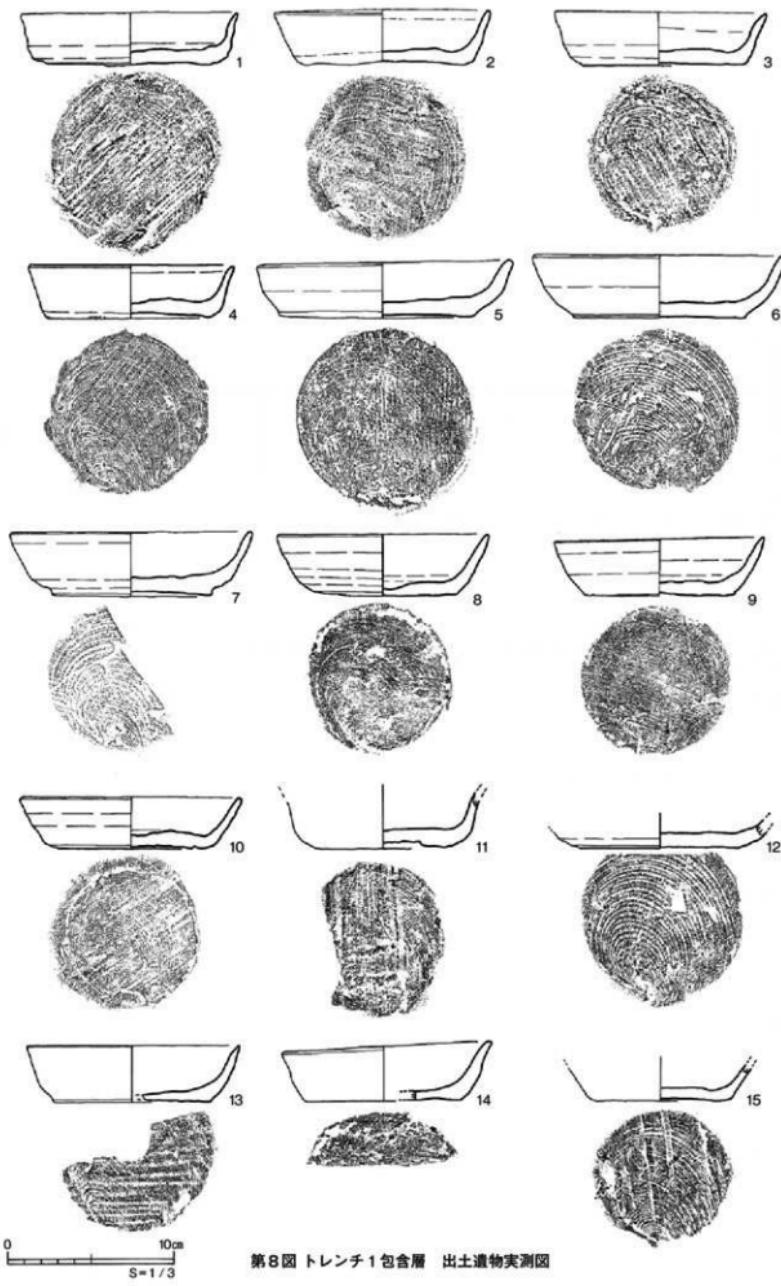
### 第3節 菊之城跡確認調査の考察

平成23年度の菊之城跡の確認調査は、主郭と想定されている筆に、北東⇒南西方向にトレンチ1～3を設定した。土層を観察すると、主郭部分の原地形は全体的に東から西、さらに北から南にかけて傾斜すると考えられる。主郭をめぐっていると想定されている堀が北西側で途切れおり不自然であるが、主郭をけずって埋めた可能性もある。平成27年度に実施したトレンチ4は南東側の黄褐色砂質土層が削平を受けていないと想定すると、北から南にかけて、傾斜した地形であったことが推測される。トレンチ1～3で確認された主郭部分の地山より約1m高く、本来の地形は、菊之城跡の北側一帯が段丘状に高くなっていると思われる。

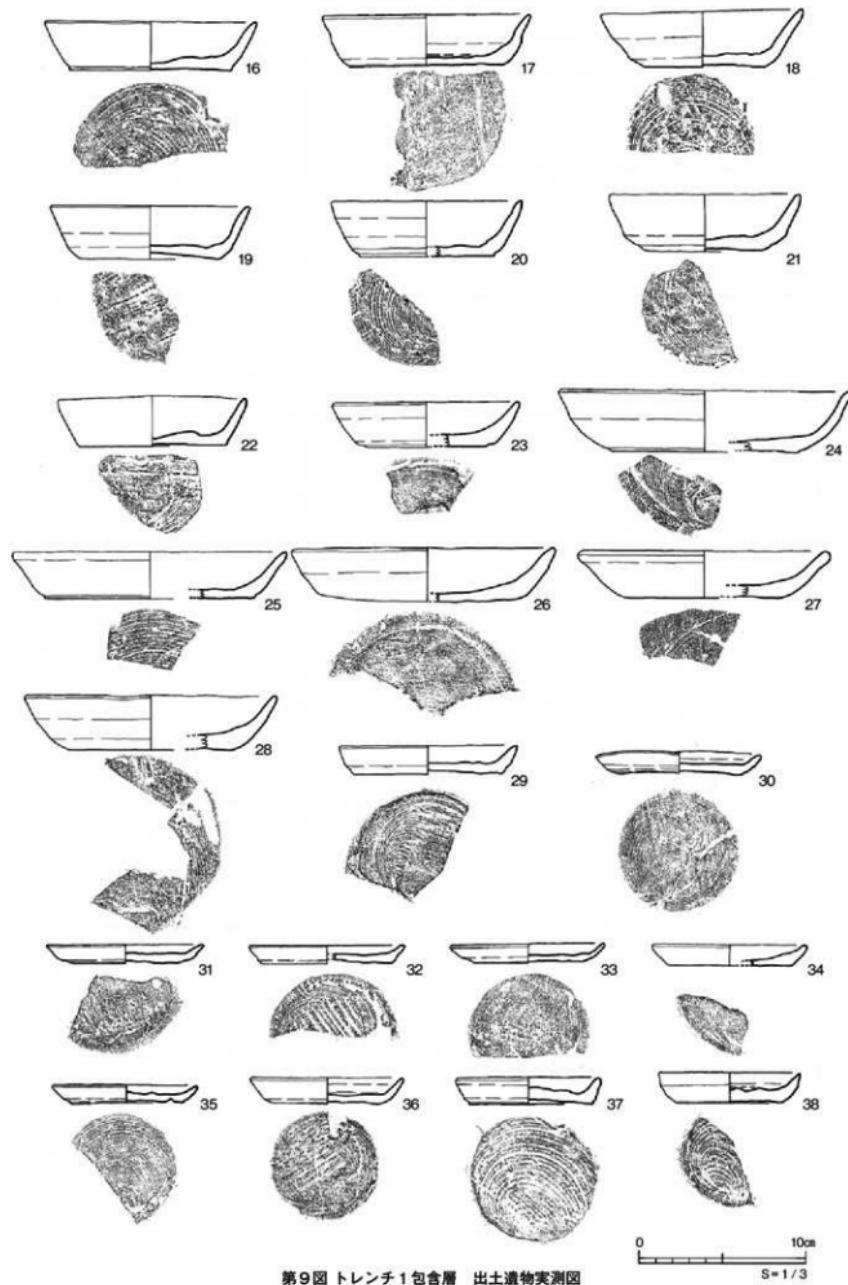
トレンチ1～3は、地表面から北東側で1.3m～2.0m、南西側で1.5m～2.2m下で造構検出面が確認できた。造構として土坑、浅い溝状造構、ピット等が検出された。トレンチ2、3の中央部で検出された1号溝



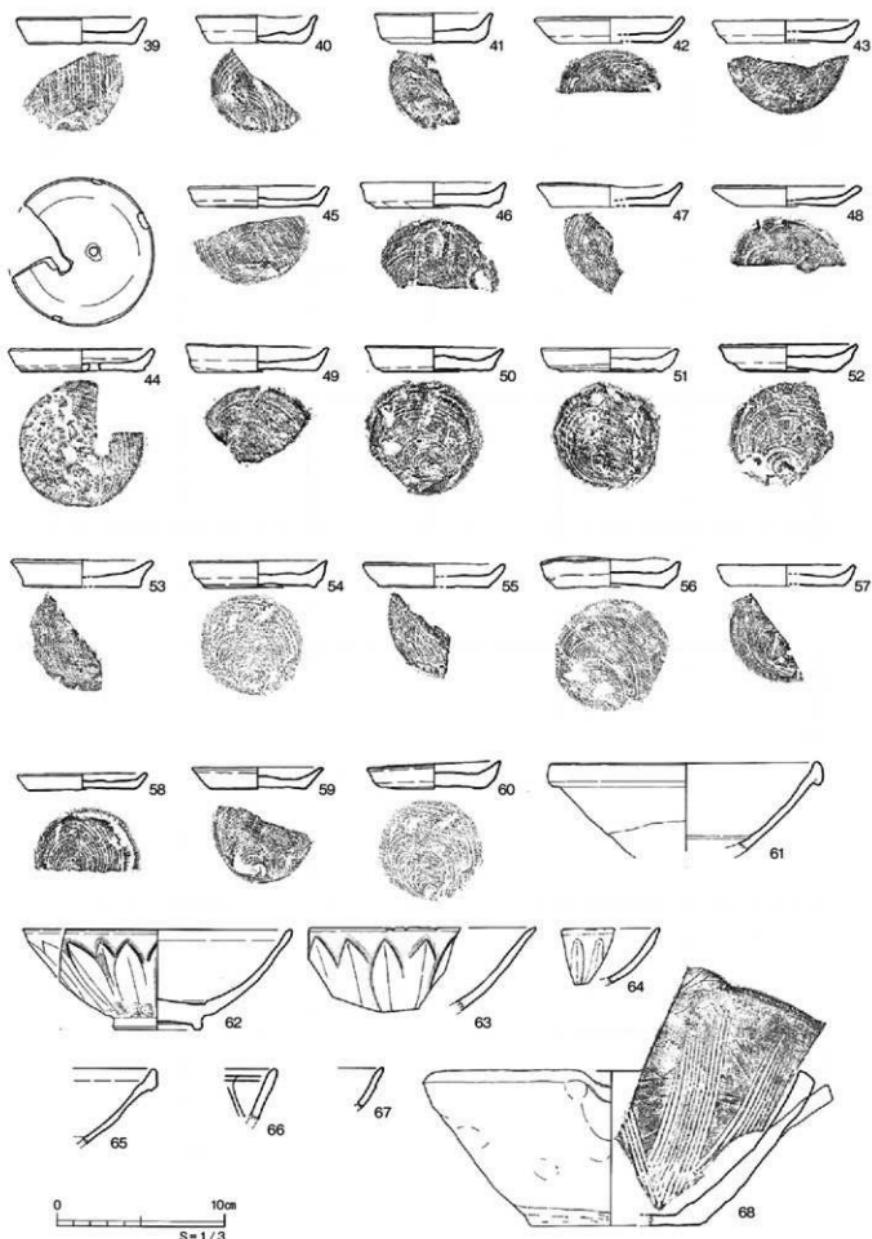
第7図 トレンチ4 2号溝北西⇒東南断面図



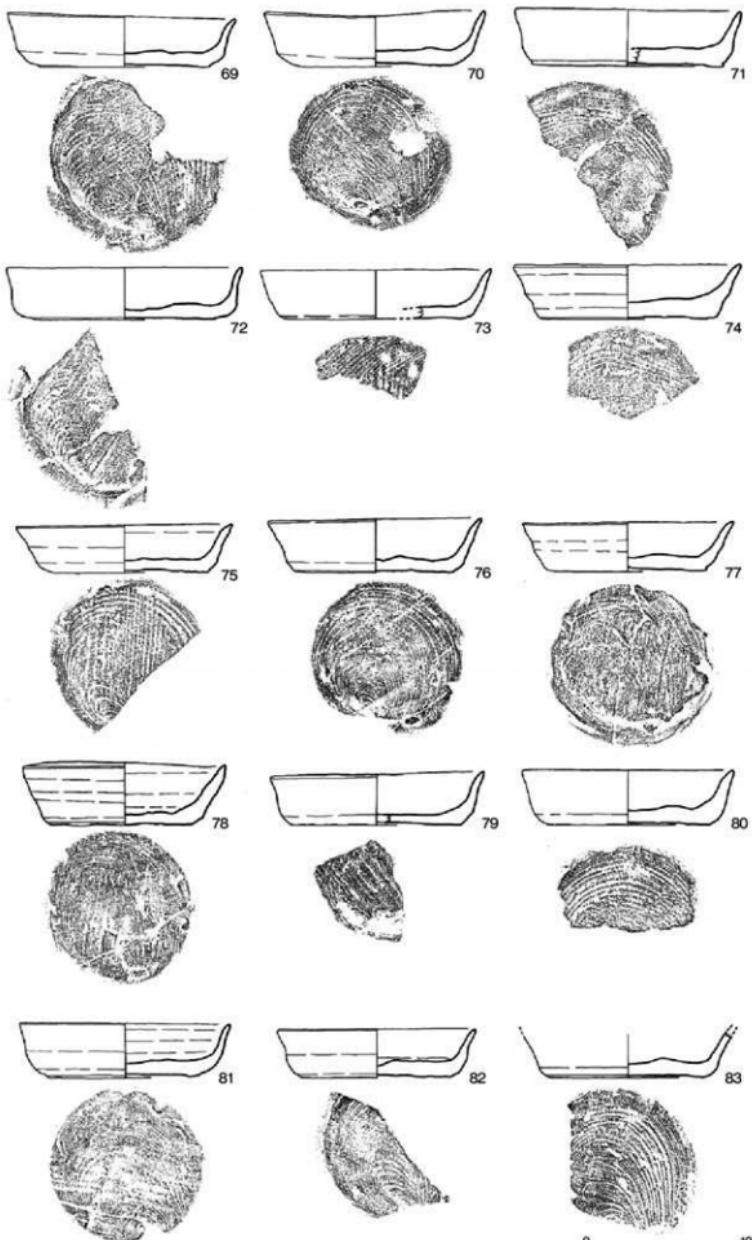
第8図 トレンチ1包含層 出土遺物実測図



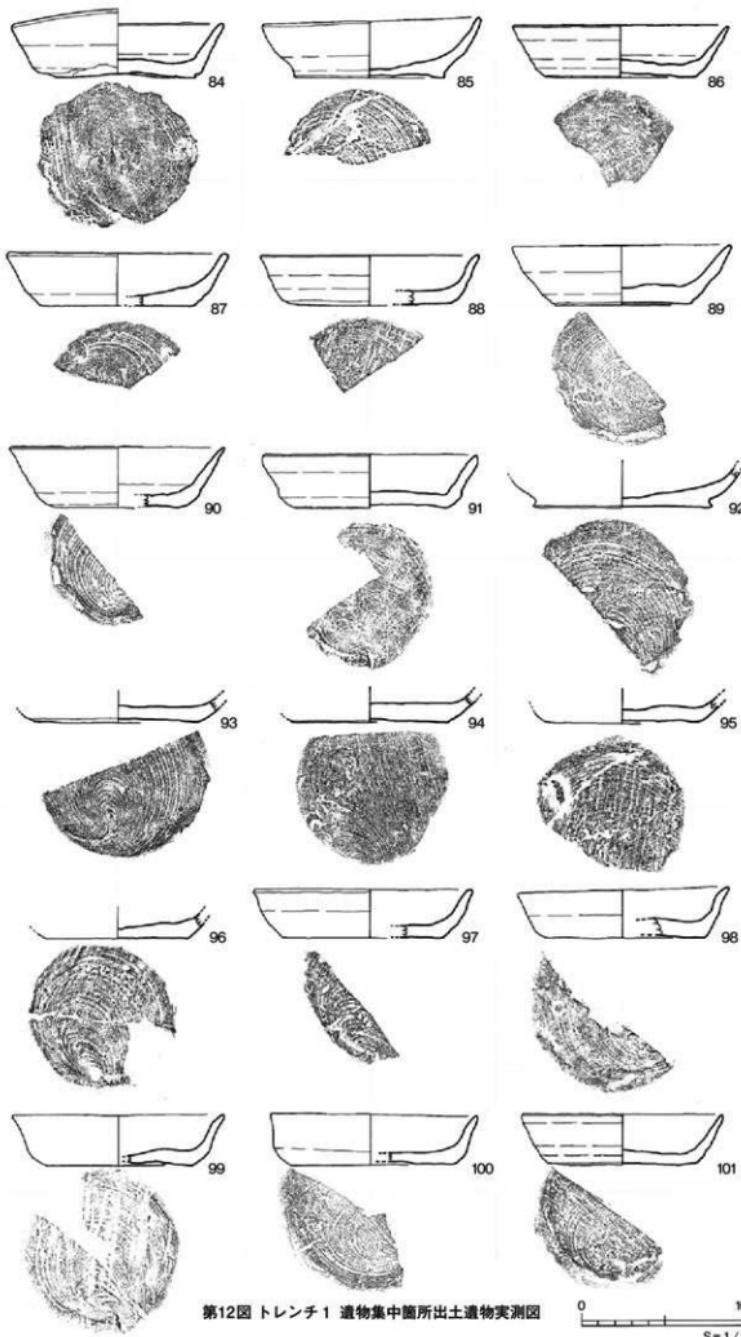
第9図 トレンチ1包含層 出土遺物実測図



第10図 トレンチ1 包含層 出土遺物実測図

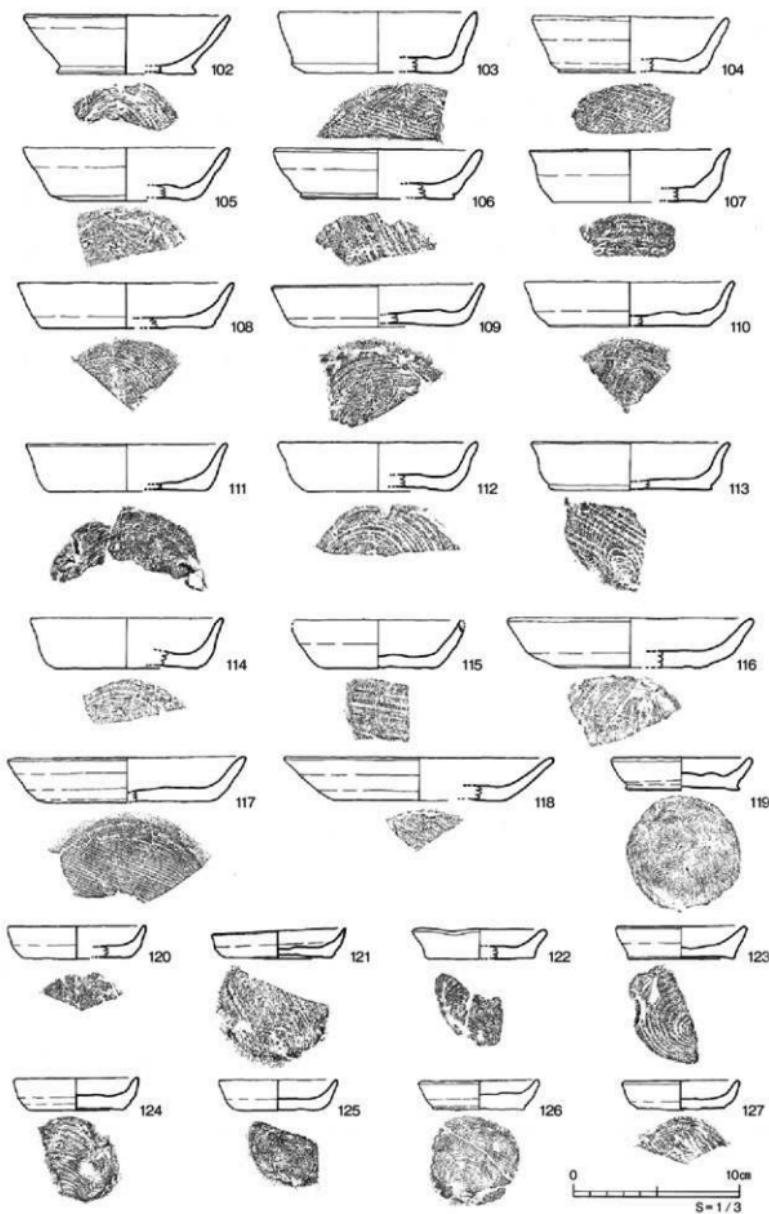


第11図 トレンチ1 遺物集中箇所出土遺物実測図

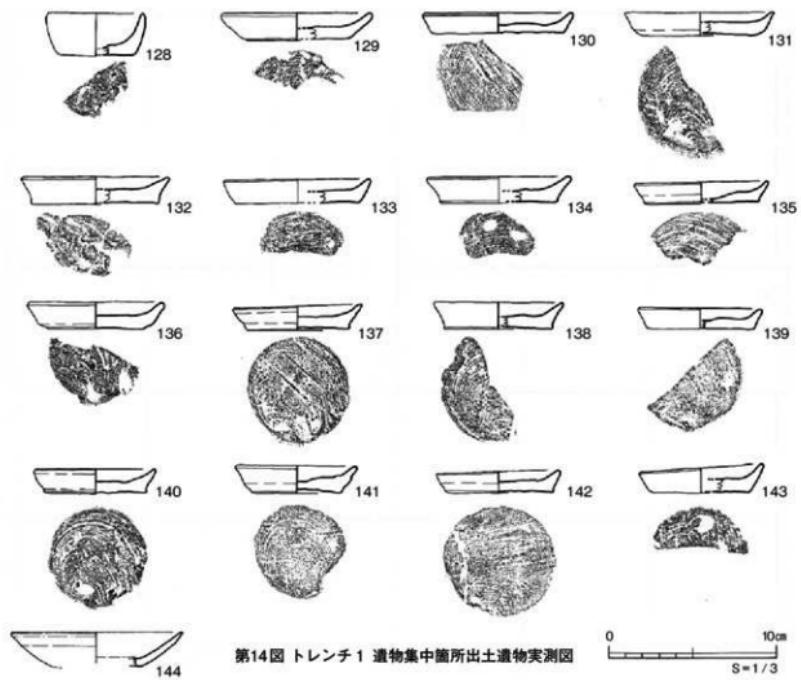


第12図 トレンチ1 遺物集中箇所出土遺物実測図

0 10cm  
S = 1/3

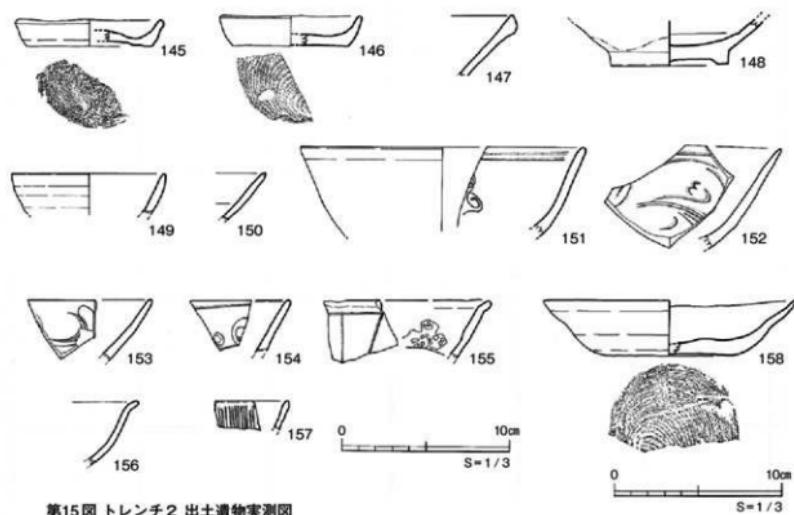


第13図 トレンチ1 遺物集中箇所出土遺物実測図



第14図 トレンチ1 遺物集中箇所出土遺物実測図

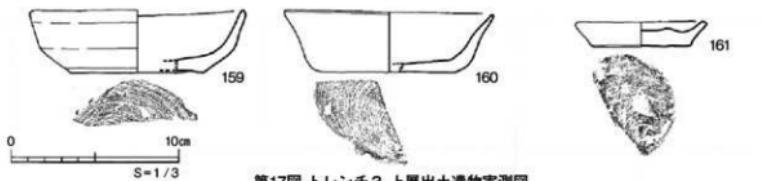
0 10cm  
S=1/3



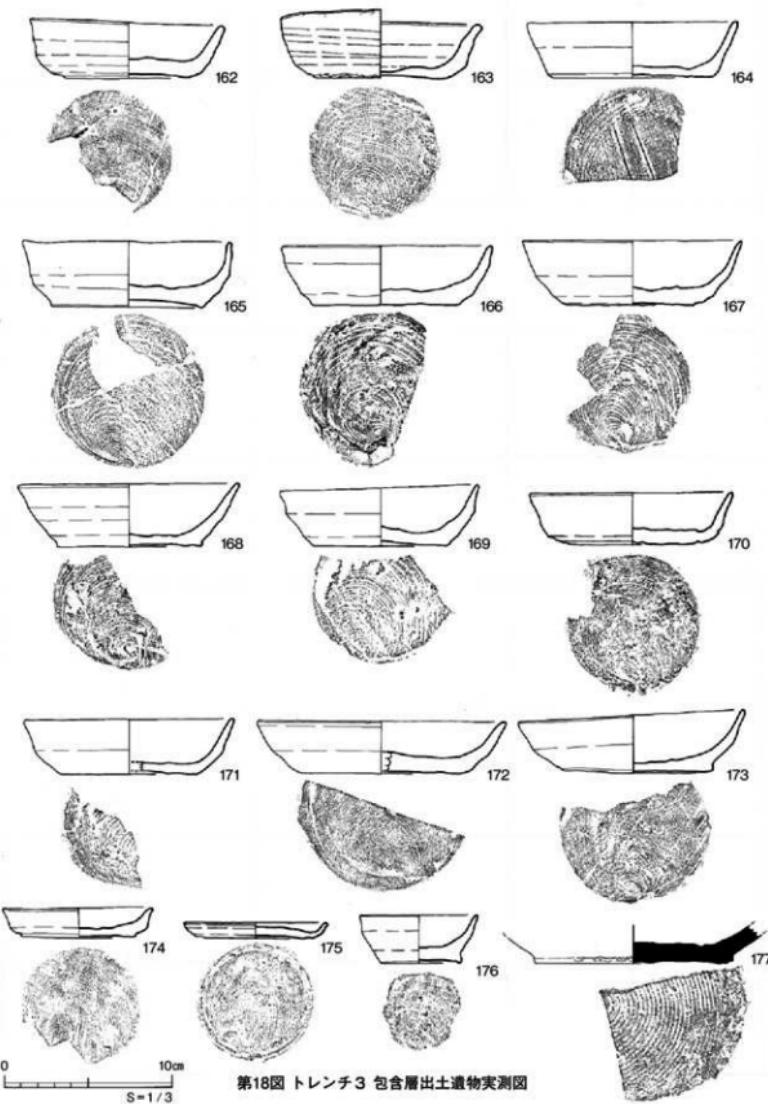
第15図 トレンチ2 出土遺物実測図

0 10cm  
S=1/3

第16図 トレンチ3 ピット8内出土遺物実測図



第17図 トレンチ3 上層出土遺物実測図

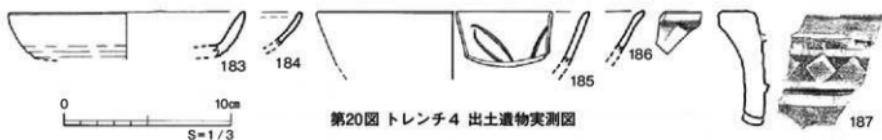


第18図 トレンチ3 包含層出土遺物実測図



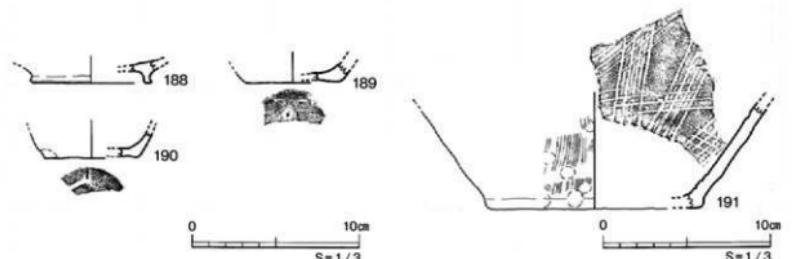
第19図 トレンチ3 包含層出土遺物実測図

0 10cm  
S=1/3

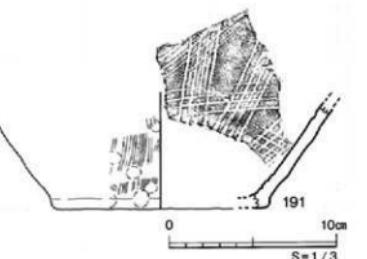


第20図 トレンチ4 出土遺物実測図

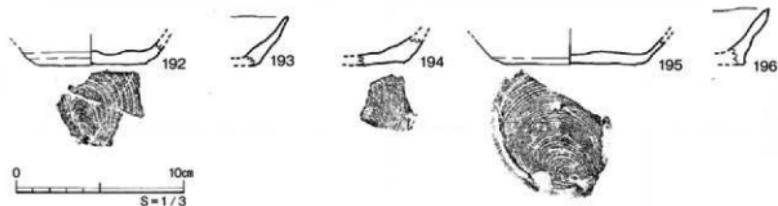
0 10cm  
S=1/3



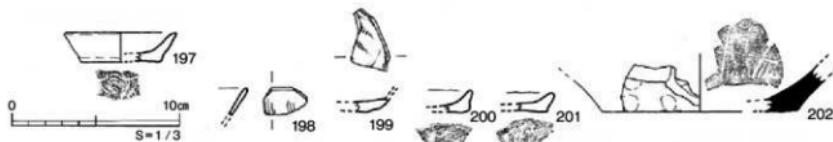
第21図 限府城下遺跡(体育館跡)確認調査出土遺物実測図



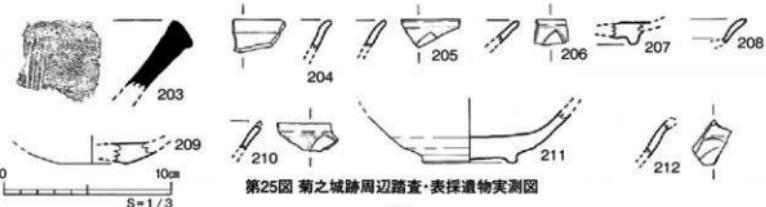
第22図 限府城下遺跡(物産館横)確認調査出土遺物実測図



第23図 限府城下遺跡(県北広域本部)確認調査出土遺物実測図(熊本県教育委員会所蔵資料)



第24図 限府城下・院ノ馬場遺跡踏査・表探遺物実測図



第25図 菊之城跡周辺踏査・表探遺物実測図

平成23年度調査

第1表 出土遺物觀察表

遺物名	遺物性状	形態	法星(+) - 1) 億円	現地	直筒										出土	調査	現存率	参考	
					内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面					
骨之破片	骨之破片	小頭	1.4	(8.1)	6.6	良	内凹	外凸	10YR6-4	灰黃色	10YR6-2	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	25%	板状圧痕?
骨之破片	骨之破片	小頭	1.8	8.1	6.5	良	内凹	外凸	75YR5-6	明褐色	75YR5-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	38%	板状圧痕、内側スス付
骨之破片	骨之破片	小頭	1.2-1.3	(8.0)	7.5	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	25%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	小頭	1.0	7.8	6.2	良	内凹	外凸	10YR6-4	灰黃色	10YR6-2	○	○	○	○	1	回転ナメラ ナメラ 切妻	35%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	小頭	1.3	(7.8)	6.5	良	内凹	外凸	75YR7-4	灰黃色	75YR7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	小頭	1.6	7.6	6.25	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1	回転ナメラ ナメラ 切妻	95%	細かい板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	残存52	16.0	-	良好	内凹	外凸	NB	灰白	TSVT1	○	○	○	○	1-2	施粉 施粉	30%	白粉付直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	6.0	16.0	5.3	良好	内凹	外凸	NB	灰白	SGY7-1	○	○	○	○	1-2	施粉 施粉	40%	外粉付直筒、内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	残存50	-	-	良好	内凹	外凸	NB	灰白	SGY7-1	○	○	○	○	1-2	施粉 施粉	35%	施粉直筒(土器中)
骨之破片	骨之破片	白頭	残存33	-	-	良好	内凹	外凸	TSVT1	明褐色	10YR7-1	○	○	○	○	1-2	施粉 施粉	35%	施粉直筒(土器中)
骨之破片	骨之破片	白頭	残存44	-	-	良好	内凹	外凸	NB	灰白	TSVT1	○	○	○	○	1-2	施粉 施粉	35%	施粉直筒(土器中)
骨之破片	骨之破片	白頭	残存24	-	-	良好	内凹	外凸	NB	灰白	TSVT1	○	○	○	○	1-2	施粉 施粉	35%	施粉直筒(土器中)
骨之破片	骨之破片	白頭	残存9.2	(21.8)	10.5	良	内凹	外凸	SYS1	SYS1	SYS1	○	○	○	○	1-2	ナメラヘタケリ	20%	13世紀
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(13.5)	10.1	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状・板状圧痕、内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	2.0	(12.9)	9.9	良	内凹	外凸	SYR7-4	褐	SYR7-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	60%	板状直筒、削痕直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.3	(13.2)	11.2	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT7-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒(土器中)
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1	(13.6)	10.4	良	内凹	外凸	75YR5-6	明褐色	75YR5-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	35%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	2.8-2.9	(13.5)	10.2	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ ナメラ 切妻	15%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(13.4)	10.2	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ ナメラ 切妻	20%	板状・板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	2.9	12.8	9.2	良	内凹	外凸	TSVT6-4	褐	SYR7-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	60%	内外面彩
骨之破片	骨之破片	白頭	3.3	12.7	9.6	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	75%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1	12.5	9.2	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	SYR7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	90%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	3.75	(11.8)	8.8	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	80%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	29-32	(12.6)	10.0	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	25%	板状・板状圧痕、内側手彫
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(13.4)	10.2	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	20%	板状・板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	2.9	12.8	9.2	良	内凹	外凸	TSVT6-4	褐	SYR7-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	60%	内外面彩
骨之破片	骨之破片	白頭	3.3	12.7	9.6	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	75%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1	12.5	9.2	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	SYR7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	90%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	3.75	(11.8)	8.8	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	80%	板状圧痕
骨之破片	骨之破片	白頭	29-32	(12.6)	10.0	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	SYR6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	25%	板状・板状圧痕、内側手彫
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(12.6)	9.6	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT5-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	25%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(12.6)	9.6	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.5	(12.6)	7.7	良	内凹	外凸	SYR6-4	灰	SYR7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.6	(12.5)	7.2	良	内凹	外凸	TSVT6-6	灰	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	80%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.15	(12.6)	6.9	良	内凹	外凸	TSVT7-4	灰	TSVT7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	60%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	2.9	12.0	6.9	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	80%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	2.9-3.0	(12.6)	6.6	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	80%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.5	(12.6)	7.7	良	内凹	外凸	SYR6-4	灰	SYR7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.6	(12.5)	7.2	良	内凹	外凸	TSVT6-6	灰	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.15	(12.6)	6.9	良	内凹	外凸	TSVT7-4	灰	TSVT7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	60%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	2.9-3.0	(12.6)	6.5	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	80%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.0	(12.4)	8.9	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	60%	内外面彩付
骨之破片	骨之破片	白頭	2.8-2.9	(12.2)	9.4	良	内凹	外凸	TSVT5-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	30%	丸變成云丘?
骨之破片	骨之破片	白頭	3.0	(12.0)	8.9	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	TSVT7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1-3.5	(12.0)	8.1	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	2.7-2.9	(12.6)	8.0	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	TSVT7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	30%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	2.7-2.9	(12.6)	9.2	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	30%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.0	(12.4)	8.9	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.3	(11.4)	10.1	良	内凹	外凸	TSVT5-6	灰	TSVT5-3	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	12%	板状直筒、内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(12.1)	6.8	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	15%	板状直筒(4回轉)
骨之破片	骨之破片	白頭	3.0	(12.0)	8.8	良	内凹	外凸	TSVT5-6	灰	TSVT5-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	12%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1	(11.6)	9.0	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1-3.5	(12.0)	8.1	良	内凹	外凸	SYR6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.3-3.6	(11.6)	8.7	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	TSVT7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	12%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.3	(11.4)	10.1	良	内凹	外凸	TSVT5-6	灰	TSVT5-3	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	12%	板状直筒、内側スス付
骨之破片	骨之破片	白頭	3.2	(12.1)	6.8	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒
骨之破片	骨之破片	白頭	3.0	(12.0)	8.8	良	内凹	外凸	TSVT5-6	灰	TSVT5-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	12%	板状直筒、外側手彫
骨之破片	骨之破片	白頭	3.1	(11.6)	9.0	良	内凹	外凸	TSVT6-6	褐	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	40%	板状直筒、外側手彫
骨之破片	骨之破片	白頭	2.8-3.0	(12.6)	8.0	良	内凹	外凸	TSVT7-4	褐	TSVT7-4	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	30%	板状直筒、外側手彫
骨之破片	骨之破片	白頭	2.5	(12.4)	8.4	良	内凹	外凸	TSVT6-6	灰	TSVT6-6	○	○	○	○	1-2	回転ナメラ 回転ナメラ 切妻	20%	板状直筒

第1表 出土遺物観察表

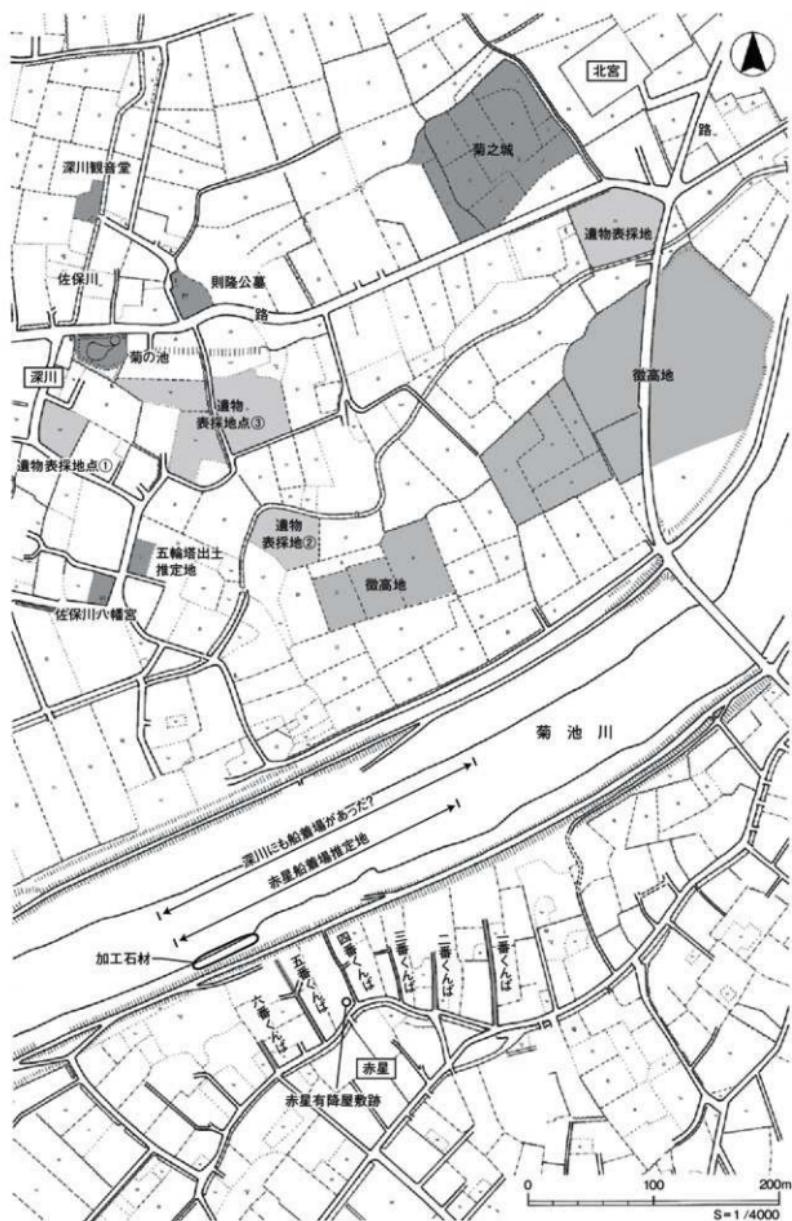
第1表 出土遺物觀察表

平成27年度調査

品目	品目名	調査区	解説	特徴	漁業量(ton)		漁獲量(ton)		内湾		外湾		漁獲量(ton)		船上		漁獲量(ton)		調査		純生産量(ton)		備考
					底曳網	手網	底曳網	手網	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	
④ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	土御前	年	底曳網	2.7	(140)	0.9	直	後曳網	7.5V7-1	(後曳網)	5V6-3	○	○	○	○	○	○	回転	回転	14%	中世
⑤ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	白崎	黒鮎	底曳網	20	—	—	直	曳網	2.3V8-1	(曳網)	16G-1	—	—	—	—	—	—	回転	回転	—	新潟県立水生生物研究所
⑥ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	音頭	鯛	底曳網	32	(32)	2	直	曳網	4.2V7-2	(曳網)	12G-2	—	—	—	—	—	—	回転	回転	—	新潟県立水生生物研究所
⑦ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	音頭	鯛	底曳網	25	—	—	直	曳網	2.7V6-2	(曳網)	16G-2	—	—	—	—	—	—	回転	回転	11%	内洋片鱈主張
⑧ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	音頭	鯛	底曳網	25	—	—	直	曳網	2.7V6-2	(曳網)	16G-2	—	—	—	—	—	—	回転	回転	—	内洋片鱈主張
⑨ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	上呂	大根鰐	底曳網	5.5	—	—	直	曳網	2.5V7-7	(曳網)	7.5V8-8	○	○	○	○	○	○	ハチドリ	ハチドリ	—	新潟県立水生生物研究所
⑩ 鮎之越鱈	ルンバ	2号港	上呂	大根鰐	底曳網	6.12	—	—	直	曳網	2.5V7-7	(曳網)	7.5V8-8	○	○	○	○	○	○	ハチドリ	ハチドリ	—	新潟県立水生生物研究所

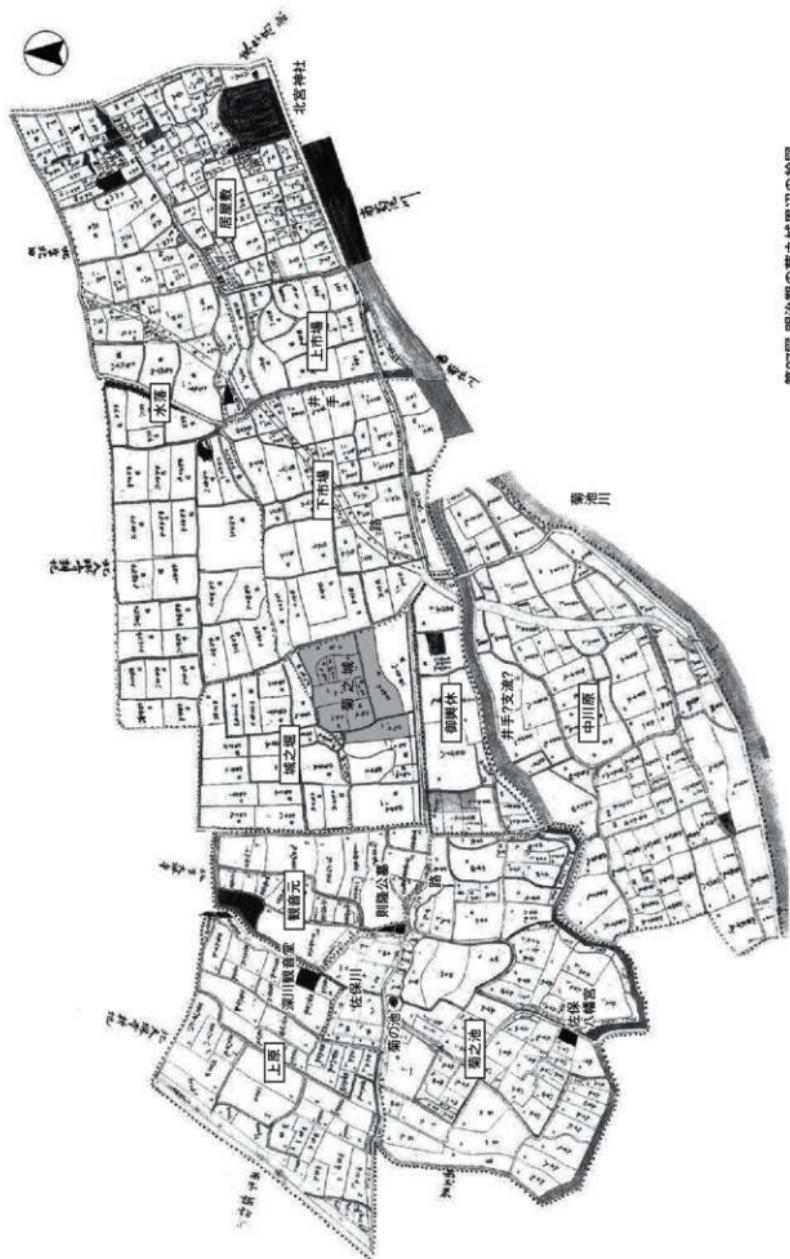
#### 表採、調查等採取資料

第1表 出土遺物觀察表



第26図 菊之城周辺の景観

第27図 明治期の菊之城周辺の絵図



は、北西⇒南東方向の区画溝ではないかと考えられる。トレンチ3ではピットを多数検出したが、掘建柱建物等の存在は確認できなかった。確認調査時は城としての確証を得るための調査であったため、柱穴ととらえ何基かサンプルで掘り下げを試みたが、検出した限りでは建物の痕跡は確認できなかった。ピット群から、主郭部分と考えられる筆について建物が存在したことが推測される。土坑については性格は不明である。トレンチ4で検出した2号溝は、主郭部分の北西側の堀と推測される箇所よりさらに外側で北東⇒南西に延び、主郭部分よりも高いレベルにある。遺構埋土中に15世紀代の遺物も認められることから、菊之城に関連した遺構でない可能性も多い。史跡調査検討委員会小畠委員からは、この遺構が菊池一族時代のものであれば、これまで城の範囲とされていた箇所だけでなく、その後背にある北西側の一段高い箇所一帯にも関連施設が存在したのではないかとの示唆を受けた。別の開発事業に伴い実施した菊之城跡北西側一帯の確認調査では、掘建柱建物と推測されるピット、住居址の可能性がある硬化面を検出し、須恵器、土師器、青磁等が出土している。さらに周辺では輸入陶磁器等を表探すことができ、菊池川では舟着場の存在も伝承されていることから、菊之城が独立して所在していたわけではなく、居館を中心とした施設が集約されていたことも考えられる。

トレンチ1～3は、地表面から0.7～0.9m下の客土直下の層とアカホヤ二次堆積層の間に、古代から中世にかけての遺物包含層が確認された。トレンチ1は黒褐色土層（Ⅱ層）、トレンチ2は暗褐色土層（Ⅲ層）と暗褐色土層（Ⅳ層）、トレンチ3はにぶい褐色土層（Ⅳ層）、褐灰色土層（V層）が遺物包含層にあたる。遺物は主にトレンチ1、3、トレンチ1の遺物集中部から出土した。土師器壺、小皿が多く出土し、いずれも小片であるが白磁碗、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、陶質系擂鉢、瓦器碗、須恵器等も認められた。土師器の特徴、法量から土師器壺、小皿は肥後の中世土師器研究年の第9期（13世紀前半～中葉）から第10期（13世紀後半）の範疇にあると考えられる。土師器壺、小皿の底部切り離し技法は糸切りのみでありヘラ切りは認められず、前代に比べて法量の小型化が始まる時期である。菊之城は初代則隆から十五代武光まで250年以上本城であったと伝えられており、調査前は11世後半～14世紀中ごろまでの遺物が満遍なく出土するのではないかと想定していたが、出土遺物は13世紀前半～後半が主体を占めた。

また菊之城跡のトレンチ1～3から出土した炭化物は、13世紀前半～15世紀中ごろの数値を示しており、伝承による菊之城が存続した期間と整合することが判明した。

#### 第4節 菊之城跡周辺の踏査等の成果

菊之城跡は菊池川を南に見下ろす河岸段丘上に位置する。約300m南東が菊池川である。伝承等では、初代則隆が菊之城に居館を設けた延久2（1070）年が、菊池一族のおこりとされている。当該地は菊之城に比定されており、菊池古城、深川城等の別称も伝えられる。現代も主郭部分ではないかと思われる筆と、その北、東、南の筆が一段低く、堀跡ではないかと考えられている。江戸時代に編纂された『菊池風土記』等の文献資料には、菊之城跡やその周辺の初代則隆公墓、菊の池も記述されており、近世の菊池一族の城と周辺の景観についての通説を知ることができる。菊之城がこの場所に建造された理由として、菊池川を利用した水運の拠点との説が主流である。菊之城の対岸の赤星地区に江戸時代に舟着場があったことが記述されており、さらに菊之城側の深川にも舟着場が存在した可能性は大きい。県内で中世居館と舟着場がセット関係にあるのは相良頼景館があげられる。菊池市教育委員会では、平成29年度から複数回にわたって踏査を実施し、遺物の表探、周辺地形の把握をおこなった。

菊之城の南は菊池川に向かって徐々に傾斜しているが、急激に段差が見受けられる箇所や、周辺よりも一段高い高台状の箇所もある。中世は河川の流れが現代とは異なっていた可能性もあるが、江戸時代に著された『菊池川全図』や明治時代の絵図に描かれた流路は現在とほぼ同じであり、少なくとも江戸時代後期から

河川の流れは変わっていないことがわかる。

菊之城跡の所在地の小字名は城之堀であり、城を連想させるものである。またその東側には上市場、下市場の小字がのこる。水運と関りがあったと推測される菊之城に隣接してこのような小字名がのることは興味深い。

菊之城跡から約240m南西に、深川に居館を構えた初代則隆の墓が所在する。墓自体は文化年間に造られたものである。隣接して菊の池跡がある。池が菊の花の形をしていたからとも、周辺に菊の花が咲き乱れていたからともいわれ、ここから菊池の地名がおこったとの通説がある。菊は原産地の中国から、奈良時代に日本に入ってきたと考えられ、11世紀当時の菊は野菊であったようである。近隣の佐保川八幡宮の周辺の竹やぶに、かつて五輪塔があったとの伝承がある。また隣接した水田からも五輪塔が見つかっている。

深川周囲の河岸は後世の河川改修により、かつての景観を知ることはできないが、対岸の赤星地区では造成の際に残存していた直方体の加工岩を、撤去せずにそのままのこしている。地区の人々では、原位置からは移動しているようではあるが、舟着場の名残であったと伝えられている。ちょうど菊之城跡の対岸で舟着場があったのではないかと推測される場所である。赤星地区の集落内には、集落から河川に向かって延びる道がのこっている。これらは“くんば”と呼ばれていたようであり、一番から六番まである。延びる先是、赤星の舟着場伝承地である。このくんばという呼称も当時のものを反映しているのかどうかは不明であるため、言及するだけにしておきたい。また四番くんばの集落入り口付近には、赤星有隆屋敷跡の伝承がある。赤星有隆は菊池一族内の有力庶家であった。

赤星地区から約600m上流には、十七代武朝が勧請したと伝えられる阿蘇北宮神社が所在している。この神社は鳥居と参道が菊池川に面しているのが特徴である。「菊池風土記」によれば、ここにも舟着場があったとのことである。現在でも伝承があったことを記憶している人がいる。この周辺より上流は急激に浅く急流となり、舟で遡上できるのもこのあたりが限度であろうと思われる。ちなみに赤星の舟着場は、かつては北宮の測尻付近にあり、後に移ったとも記述されている。

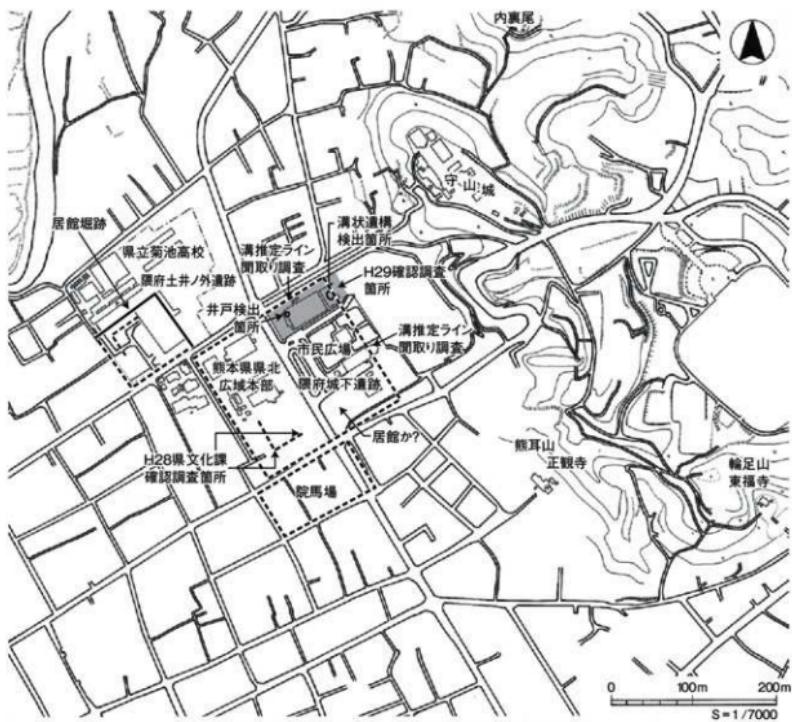
菊之城跡から菊池川にかけての一帯で、土師器、輸入陶磁器が多数表採されている。いずれも小片であったが、一部、蓮弁華紋の龍泉窯磁器が見受けられた。

## 第5節 守山城跡及び隈府の町並み

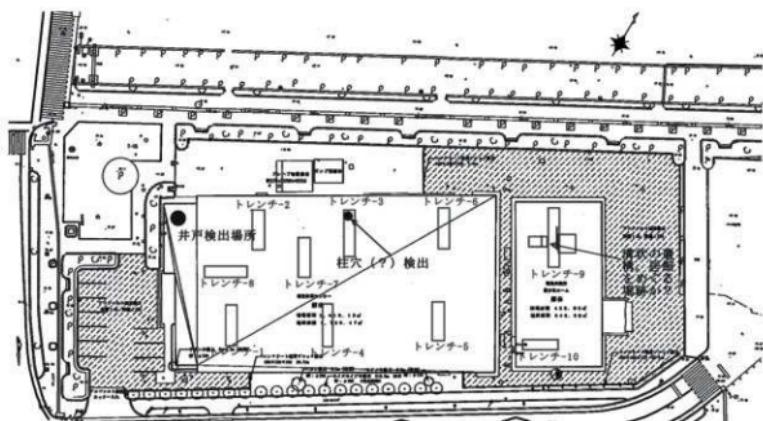
隈府の中心に位置する県立菊池高校建て替えの際に発掘調査が実施された隈府土井ノ外遺跡では、14世紀後半～15世紀前半代の遺物が出土し、多数の建物跡を作り90～100m四方の堀をめぐらせた居館跡が確認された。堀の方向が現在の隈府の町並みと整合するものであり、およそ650年前から守山城直下の隈府の町並みは、計画的に整備されていた可能性を示すものであった。ただし、当初想定されていた菊池氏の居館跡か否かの証明は、その時点では困難であった。

平成29年度に、守山城直下の市民広場の再整備に伴って、昭和40年代に建てられた体育館等撤去後、隈府城下遺跡のトレンチ調査を実施した。地表面から18～24mまで後世の客土であったが、その下からピット、溝状遺構等を検出した。

溝状遺構は、隈府土井ノ外遺跡で確認された居館の堀から推測される、当時の町中の区割りと直交するものではないかと考えられる。市民広場周辺は、戦後まで現在の菊池神社参道に沿って溝があり、それが直角に折れて南東へ延びていたとの複数の証言がある。この溝状遺構はその箇所にあたる可能性がある。また平成28年度、県教育委員会が実施した市民広場前の県北広域本部の確認調査でも、溝状遺構が検出されており、糸切り底部の土師器皿が出土している。さらに敷地内南西側では、隈府の町並みに沿った段差、隣接するグラウンド内には土壠状の高まりがあり、周辺でも土師器小片を表探すことができる。これらの成果を



第28図 確認調査結果等による隈府城下遺跡周辺想定図

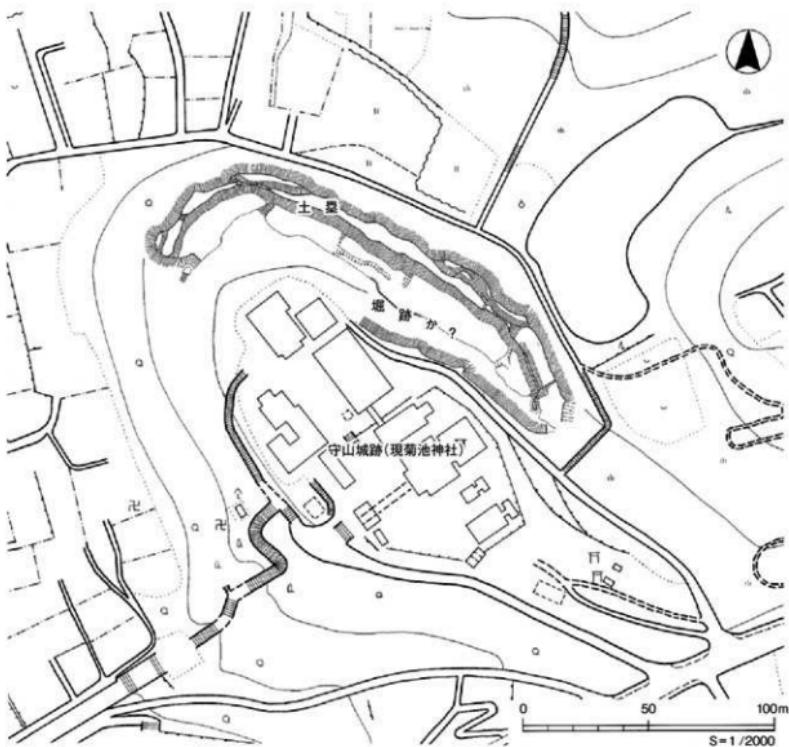


第29図 隈府城下遺跡（市立体育馆・青少年ホーム跡地）確認調査結果

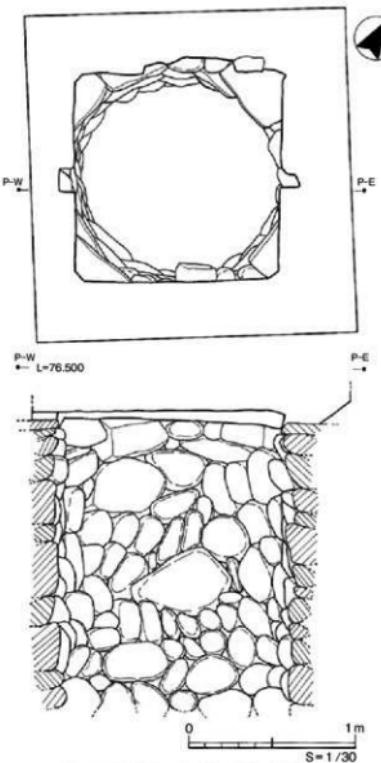
併せて推測すれば、確認された溝状遺構を同一の居館の堀ととらえた場合、市民広場周辺に約200m四方のきわめて規模の大きな方形居館の存在がうかがえる。隈府の町並みは現在では商店街化し、道路も舗装されているが、昭和初期までは各所に土壘状の高まりや、竹やぶがあったとの証言もある。

井戸跡は体育館解体後に見つかった。人頭大の河原石を円形に組み合わせ、直径1.8m、深さは約10mを測る。底部付近には石組みではなく、オーバーハング状にえぐられているが、これは中世の井戸の底に桶を据えた事例があることから<sup>(10)(11)</sup>、その桶が腐食してこのようになったのではないだろうか。隈府土井ノ外遺跡でも、規模はやや小さいが河原石で石組みをした類似した井戸が見つかっている。これらのことからこの井戸は中世のものであった可能性がある。他の調査事例等を参考にして、さらに検証する必要があるだろう。市民広場周辺は、明治時代以降、県立蚕養学校の官舎があったとのことであり、井戸にはポンプがのこされたままであった。再利用したものかもしれない。ちなみに平成30年度の民間開発に伴う近隣の隈府町中の確認調査で、河原石の石組みの井戸が見つかっている。検出面は現在の道路から約2.0m下のレベルであり、町並みは大規模な造成がおこなわれたことが推測できる。

さらに隣接して院馬場の字名が現在ものくる。院馬場は「犬追う物」からきた地名と推測され、居館や城の周辺、大手口、都市の中核部に置かれた事例が多いことから<sup>(12)(13)</sup>、居館のそばに馬場が設けられていた可能性が示される。「肥後國誌」には「今之正觀寺村にゐんの馬場と云處あるを謹江公正か菊池風土記に其處を城



第30図 守山城跡土壘



第31図 限府城下遺跡検出井戸実測図

断できない。中世の城に関する今後の調査を待ちたい。

## 第7節 菊之城跡確認調査出土炭化物測定

平成23年度の菊之城跡の確認調査で出土した炭化物4点の樹種同定と、放射性炭素年代測定をおこなった。測定をおこなった試料は試料No.1（トレンチ1、中央部包含層上部出土炭化物）、試料No.2（トレンチ2、中央部南壁直下包含層上面（遺構検出面）出土炭化物）、試料No.3（トレンチ2、1号土坑出土炭化物）、試料No.4（トレンチ3、中央部V-1層出土炭化物）とする。

樹種同定試料は木材解剖学的手法を用いておこなった。同定の結果、菊之城跡出土の炭化材は、試料No.1はサカキ (*Cleyera japonica* Thunb.)、試料No.2はスギヒノキ科 (*Cryptomeria japonica* D.Don-Cupressaceae)、試料No.3はシイ属 (*Castanopsis*)、試料No.4 (*Quercus* sect. *Aegilops*) はコナラ属クヌギ節であった。いずれの樹種も温帯下部暖温帯域に分布する樹種である。スギヒノキ科は針葉樹、シイ属とサカキは照葉樹、コナラ属クヌギ節は落葉広葉樹である。どのような木材が炭化したかは不明であるが、スギヒノキ科は木理通直な良材で、シイ属、サカキ、コナラ属クヌギ節は比較的強靭な材であり、いずれも大材がそれ建築材にも使用される。シイ属やコナラ属クヌギ節は二次林種である。菊之城跡の炭化材

院の跡ならんといへるはまたしき考にて是は菊池家の犬追物を興行せし馬場の跡にて（中略）今は訛りて其跡をいん場の町と云類にて餘所の古城跡にも今に犬の馬場といふ名の残りたるか所々に有之事」との記述がある。

## 第6節 菊之城跡・守山城跡の空中レーザー測量等

平成29年9月27日、菊之城跡と守山城跡周辺の空中レーザー測量を実施した。守山城周辺は神社の敷地であるため樹木が繁り、目視では城郭の遺構の全容を把握することが困難であったため、実施したものである。

これにより、守山城には現在菊池神社の建物がある山頂部の北側を、J字状にめぐる土壘状の遺構がみとめられた。土壘により、主郭と推測される簡所との間に、巨大な空堀状の空間が形成される。高さは最大で約3m、基部は外側が険しい斜面となっているため計測することはできないが、内側の立ち上がり部から土壘の頭頂部まで最大で約10mを測る。土壘上の平坦部の幅は最大で約7mを測り、人が歩行することができるほどの大規模なものであることがわかった。ただし土壘の外側は険しい斜面となっており、これが中世の城に伴う防御設備であるかどうかは、判断

試料名	測定No. (Beta-)	未補正(C年代) (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ 2 ) (‰)	補正(C年代3) (年BP)	暦年代(西暦) 4)
No 1	343374	800 ± 30	-26.1	780 ± 30	交点: calAD 1260 1 σ : calAD 1220 ~ 1270 2 σ : calAD 1220 ~ 1280
No 2	343375	690 ± 30	-24.3	700 ± 30	交点: calAD 1280 1 σ : calAD 1280 ~ 1290 2 σ : calAD 1270 ~ 1300, : calAD 1370 ~ 1380
No 3	343376	620 ± 30	-25.5	610 ± 30	交点: calAD 1320, AD 1350, AD 1390 1 σ : calAD 1300 ~ 1330, : calAD 1340 ~ 1370, : calAD 1380 ~ 1400 2 σ : calAD 1290 ~ 1410
No 4	343377	520 ± 30	-25.3	520 ± 30	交点: calAD 1420 1 σ : calAD 1410 ~ 1430 2 σ : calAD 1330 ~ 1340, : calAD 1400 ~ 1440

BP : Before Physics (Present), AD : 紀元

第2表 菊之城跡確認調査出土炭化物年代測定結果

は、當時遺跡周辺に生育していたものか、地域的な流通によってもたらされたと推定される。

出土した炭化物について、加速器質量分析法(AMS法)により放射性炭素年代測定をおこなった。その結果、試料No 1 は  $780 \pm 30$  年BP (2 σ の暦年代で AD 1220~1280年)、試料No 2 は  $700 \pm 30$  年BP (同AD 1270~1300年、AD 1370~1380年)、試料No 3 は  $610 \pm 30$  年BP (同AD 1290~1410年)、試料No 4 は  $520 \pm 30$  年BP (同AD 1330~1340年、AD 1400~1440年) の年代値が得られた。出土した土器は13世紀前半~13世紀後半が主体を占めており、試料No 1、2 はこの年代に近いが、試料No 3、4 は新しい数値である。

## 第8節 文献調査の成果

菊池の城については、いくつかの中世文書に見出すことができる。現存する中世文書は多くないが、当時の城名や菊池における南北朝期の動乱の情勢をうかがうことができる。本節では、本城に関連すると思われる史料をあげて検討をしてみたい。

**史料1** 年月日不詳「小代光信軍忠状」(『熊本県史料』中世編第五「詫磨文書245」)

建武三年正月八日属大宰府討手堀三郎入道殿、押寄菊池山城太手令追落武敏以下鬼徒等畢

**史料2** 建武五年四月十八日付「詫磨貞政軍忠事」(『南北朝文書』九州編第一巻、1168号「豊後詫摩文書」)

一、建武三年正月八日、菊池山城之合戦之時、致軍忠追落候畢

**史料3** 暦応三年三月付「詫磨宗直軍忠状案」(『熊本県史料』中世篇第五「詫摩文書」86号)

一、同年(建武四年)八月、菊池渡山合戦之時、舍弟彌七郎・同親類次郎五郎等、致軍忠訖

史料1、2は、建武3(1336)年の正月8日に菊池山城が攻められ、菊池武敏が城を追われたことが記されている。武敏は十三代武重の弟にあたり、この時期、懇願武重にかわって菊池の留守をあずかっていた人物である。武敏は直後の建武3年3月に九州の宮方勢力を率いて、博多の多々良浜で九州落ちをした足利尊氏と合戦している。この記述はその直前のことであるが、武家方に菊池まで攻め込まれていることがわかり、当時の緊迫した情勢をうかがうことができる。史料3は、翌年8月にも菊池渡山で合戦があったことが記録されている。隈府の東隣に亘る地名があり、位置関係から現在の守山城ではないかと推測することができる。「肥後國誌」にも「渡ハ輪足村ナリ正觀寺村一續ノ村ニテ即城山ノ下也 正觀寺建立ナキ前ハニシテ輪足村ト云 寺立テノ後分ツテ正觀寺村ト名付シナルヘシ 然レハ此渡山城モ此城ノコトナリ」との記述が

あり、菊池武光の菩提寺正觀寺が建立する前は、輪足村は城山の下まで同一であり、渡山にも山城が築かれていたことがうかがえる。菊池山城と渡山の山城が同一のものである可能性がある。

**史料4** 正平五年三月廿日付「惠良惟澄軍忠状」(『南北朝遺文』九州編第三卷、2717号「肥後阿蘇家文書」)

(正平三年十二月)同十二日西郷押寄因徒合志能登守幸隆、所楯籠之菊池陣城、始合戦、六ヶ日夜致軍功畢

**史料5** 年月欠「惠良惟澄申状追書写」(『南北朝遺文』九州編第三卷、2655号「肥後阿蘇家文書」)

惟澄此間合戦之次第、同注進候、此外肥後国菊池本城、當時合志入替武士令楯籠、去十五日武光令發向、追落外城焼払、打取因徒廿余人了、同十六日追落隈部城

**史料6** 正平四年十一月一日付「征西將軍官令旨写」(『南北朝遺文』九州編第三卷、2654号「肥後阿蘇家文書」)

為對治菊池本陣、因徒馳參之處、合志原合戦被致忠井破却外城之時、軍忠之次第、殊所被恩食也、且可伝仰舍弟豈前權守惟雄也者、征西大將軍宮御氣色如此、仍執達如件

史料4、5は、菊池陣城(菊池本城)が武家方である合志幸隆に占領され、これを武光が奪還した際の軍忠状である。また史料6は、菊池本陣に敵が攻め寄せてきたことを記述している。通説では本城が守山城へ移ったのは武光以降のことであり、これを信じるならばこの城は菊之城であるとみてよいだろうが、同時に菊池陣城とも記されていることにも注目したい。陣は一般には臨時の仮設の施設として理解されていることが多いが、設けられた期間や立地などにより、実態はさまざまであることが推測される。城と陣の違いについては、明らかに使い分けがされている場合もあれば不明確の場合もあり、使い分けがたい面も持っているようである。この合戦では同一の城が城と陣と別個に表現されているが、記したのがともに宮方であることから、意図的に使い分けたとは考えにくく、明瞭に区別されていなかったのではないかと思われる。ちなみにこの陣城という表現は、南北朝期それほど一般的ではないとのことである。また史料5で、本城とは別に隈府城が記述されている。守山城に比定することができるのではないだろうか。

**史料7** 康暦元年七月十七日付「今川了衡書状写」(『新熊本市史』史料編第二卷「阿蘇家文書(写)」42号)

一、菊池の事も南郡の事も、早々道行候みと存候、その上菊池事ハ、陣の城、くま日の城、木野城など、更々兵糧なき時分にて候間、此城々の通路<sup>二</sup>つめより候ハ、可落候条、案のうちの事<sup>二</sup>て候

**史料8** 永徳元年七月一日付「福田兼親軍忠状写」(『南北朝遺文』九州編第五卷、5672号「福田文書」)

(永徳元年)又同十六日、同國守田御発向御共仕畢、次菊池陣城致警固之處、同六月十八日、被召隈部・松山攻陣之間、致宿直、日々野伏合戦仕之刻、同廿二日、菊池武興已下因徒等令没落畢

**史料9** 永徳元年七月一日付「深堀時久軍忠状」(『熊本県史料』中世篇第五「深堀文書」17号)

(永徳元年)同五月十二日、菊池陣城令御共畢、同六月十八日、自板井御陣、熊部松尾御陣令御共、同廿二日、熊部城没落畢

**史料10** 永徳元年九月一日付「深堀時久軍忠状」(『新熊本市史』史料編第二卷「深堀文書」4号)

(永徳元年)去五月十日、馳參肥後國板井原御陣之處、同十二日、被□菊池館城之間、於当城仁致宿直之處、同六月十八日、被召隈<sup>二</sup>部(部力)城攻陣之間、日夜致合戦之刻、同廿二日夜<sup>二</sup>、武興已下因徒□□(等令力)没落訖

**史料11** 至徳元年九月日付「安富了心<sup>二</sup>軍忠状」(『新熊本市史』史料編第二卷「深江文書」2号)

一、肥後国志々木原・板井・一駄原・丸山・前原以下於在々所々御陣、致忠節、□□□□□徳元年□月廿日馳參、同廿六日本野菊池之御勢仕之時、令御共畢、同六月廿二日、菊池次郎武朝要害熊耳城没落□□(之後カ)、同廿六日、為□□□□徒等御對治御発向之間、於鯉隈之御陣、兩三ヶ年越年仕、致宿直警固□(畢カ)

弘和三年七月 日「菊池武朝申状写」(『熊本県史料』中世篇第四「志岐文書」16号)

記事年号 (元号の下に年号)	史中科院名	史料名	記述	守山城
承久二年(1200年) 7月15日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久2年 正月8日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久3年(1201年) 8月	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久3年(1201年) 12月11日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久3年 12月16日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久4年(1202年) 11月1日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
正平22(1367年)	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久元年 7月17日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久元年 5月12日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
承久元年 6月18-22日	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城
弘和2年(1382年)	守山城 「守山城土記(公)」	守山城の歴史とその特徴	守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。守山城は、元は守護の城で、後に守護の城へ昇格した。	守山城

第3表 文獻史料に記述された「守山城」「守山城」「守山城」(延久・建武年間～永徳・弘和年間)

**史料12** 二年之比者、武朝守<sub>…叙旨…</sub>、奉<sub>…仕…</sub>將軍宮之間一、一族以下扶持人等受<sub>…彼朋党之語…</sub>、権二龍分領  
守山之要害

**史料13** 弘和四年七月四日「葉室親善申状写」（『南北朝遺文』九州編第五卷、5825号「菊池古文書」）  
武朝・親善等之一族、忽企反逆、権龍守山城

史料7以下は、武朝時代から30年ほど下った孫の武朝時代のものである。隆盛を誇っていた菊池も、退潮に歯止めをかけることはできず、武家方の今川了俊により追い詰められていた。事実、この10年ほどちに南北朝は合一する。その時代背景を反映してか、史料8～11は攻め手側の軍忠状である。

史料7では今川了俊が菊池の城として陣の城とくま目の城をあげ、これらの城には兵糧がすぐでなく、城の道から攻めれば落城するだろうと記されている。史料8では福田兼親が菊池陣城の警固をしたこと、その後隈部・松山の陣を攻めた際に宿直をしたことが記されている。史料9では深堀時久が菊池陣城、隈部松尾の陣へ供をし、熊部城が攻め落とされたことが記されている。史料10では深堀時弘が菊池館城で宿直し、隈□城を攻めたことが記されている。史料11では、武朝の籠もる熊耳城が攻め落とされたことが記されている。史料8～11はすべて、永徳元年6月22日に武家方が菊池武朝（興）の立て籠もる熊部城（隈□城・熊耳城）を攻め落とした同一の軍事行動の記述である。軍忠状の書き手によって城名は異なり、武家方は統一した名称を使っていないことがわかる。史料12の「菊池武朝申状写」は、吉野の朝廷に対して菊池の懸念武朝が、出自や代々の功績を奏上した貴重な史料である。一族や臣が守山之要害に立て籠もったことが記されている。史料13も反逆を企てた者が守山城に立て籠もったことが記録されている。弘和年間に守山城（守山之要害）という城名が登場していることに注目したい。守山城の直下は現代では隈府の地名があり、菊池武朝の菩提寺正觀寺の山号が熊耳山であること等からも、熊部城（隈□城・熊耳城）は本城機能を持ち、14世紀にはすでに宮方からは、現在伝わる守山城の城名で呼ばれていたことがうかがえる。史料8～10では、菊池陣城（菊池館城・陣の城）の城名が記されており、史料4等の記述から菊之城と推察できるが、すでに武家方の勢力圏に入っており、もはや菊池の本拠としての重要性はなくなっているようだ。史料7に記された陣の城、くま目の城も、それぞれ菊之城と守山城に比定されるかもしれない。またこの時期、他の文書に城や陣の記述があり、菊池周辺で軍事活動が活発であったことがうかがえる。

## 第IV章 総括

菊之城跡の確認調査では、城と伝承されている箇所にトレンチを設置し、溝状遺構、ピット等を検出することができた。また13世紀前半から後半にかけての大量の土師器、13世紀前半～15世紀中ごろの数値を示す炭化物も出土しており、城、もしくは居館の存在をうかがうことができた。さらにその後背にあたる北西側一帯にも、関連施設が存在した可能性がある。周辺では輸入陶磁器等を表探すことができ、菊池川では舟着場の存在も伝承されていることから、菊之城が独立して所在していたわけではなく、居館を中心とした施設が集約されていたことも考えられる。この調査では、規模や構造等の全体像を把握するまでにはいたってはいない。また出土遺物の時期が一時期に集中する等、疑問点は多く、城と居館の理解も含めて今後も検証をすすめていく必要があると考えられる。

守山城跡については、現在菊池神社の敷地である。伝承や文献史料では、十六代武政の代に、現在は菊池神社が所在している守山城へ本城機能を移したとされている。一部に土星が確認されているが、これが中世のものかどうかは不明である。一方隈府市街地では、守山城直下の隈府城下跡の確認調査で溝状遺構、井戸等を確認した。200m四方におよぶ規模の大きい館の存在がうかがえる。100m超級の規模の方形居館は西

日本では大内氏の守護館等、事例が限られている。菊池一族の経済規模や格式等、発掘調査以外の視点も交えつつ、慎重に考察をすすめていきたい。

また隣接する隈府土井ノ外遺跡の過去の発掘調査では90~100m四方の居館の存在が確認されており、堀の向きが現在の街並みと合致すること、隈府城下遺跡の南側には院馬場の地名が現在も残ること等から、中世の隈府一帯は規格された町並みが整備されていた可能性が示された。ただし周辺は市街地であるため、広範囲の調査等是不可能であり、実態を知ることは困難である。確認調査等により、資料の蓄積が必要であろう。

菊之城跡等から出土した遺物を観察すると、菊之城跡では13世紀代を中心とする土師器が主体である。一方、隈府土井ノ外遺跡からは14世紀後半~15世紀前半代の土師器が主体であった。守山城の時代を証明する物証はないが、城と居住エリアである隈府土井ノ外遺跡が不可分なものと想定すると、守山城は隈府の町の展開と併行して存在したと考えてよいのではないか。これを踏まえると、14世紀代十六代武政のころに、本城が菊之城から守山城に移ったとされている伝承と整合していると思われる。また文献からも14世紀中ごろは菊之城に対する武家方の侵攻が、後半には隈府方面に移っていること、さらに十七代武朝が守山城に籠城していることから、本拠地が移っているのではないかと推測することができる。

文献史料から、14世紀当時の菊之城、守山城の記録は以下のように整理することができる。

- (1) 14世紀前半の建武年間には菊池山城（菊池渡山）での合戦の事が記され、守山城に比定される可能性がある。本城と伝えられている菊之城と思われる記述はない。
- (2) 14世紀半ばの正平年間には、菊池陣城（菊池本城・菊池本陣）の記述がある。方が本城と記録している。菊之城と考えることができるだろう。武家方に攻められ一時は占拠されており、当時の緊迫した情勢をうかがえる。また隈部城の記述もあり、守山城に比定される可能性がある。
- (3) 14世紀後半代の永徳・弘和年間には、惣領武朝は熊部城（隈口城・熊耳城）に立て籠もって抵抗しており、通説ではこれが菊之城から移ったとされる本城守山城と推測される。この時期、守山城名の記述が初見される。菊之城と思われる菊池陣城（陣の城・菊池館城）の記述はあるが、すでに武家方によって落城しているようであり、本城機能が移転したとの伝承を補強している。

菊之城は「菊池陣城・菊池本城・菊池本陣・菊池館城・陳の城」と呼称されていたと考えられるが、現在の菊之城の名称は、当時から使われていたことはうかがえず、後世につけられたものと推測される。一方、守山城は「熊部城・隈口城・熊耳城・守山之要害・守山城（建武年間の菊池山城（菊池渡山）も守山城である可能性あり）」と呼ばれていたことがわかり、14世紀後半代の弘和2年のころ、すでに守山城の名称が使われていたことがわかる。

以上、平成23年度から実施してきた菊之城跡、守山城跡を中心として中世菊池一族に関連する調査成果を、概要報告書としてまとめてみた。今回の一連の調査は、発掘調査や現地踏査、文献資料等、客観的な事実から菊池一族の実像に迫ろうとしたものである。

菊池一族の動向は、中世の肥後国を知るうえで、欠かすことのできない重要な役割を果たしている。しかしこれまでは物証の少なさや、近世以降の伝承が先行しすぎてしまったこと等により、実像が充分にとらえられているとは云いがたい。また中世の城についても、後世の文献に頼っての比定がなされている状況であり、現在までは考古学的成果の検証がほぼ皆無である。伝承を頭ごなしに否定することは慎まねばならぬし、文化財指定段階で城館の場所を特定した先人たちの慧眼には敬意を表するものであるが、いつまでもその成果に安穏としているわけにもいかない。

近年の発掘調査により、物証は少しずつ増えつつあるが、充分な成果を得るには至っていない。これまでには菊之城跡、守山城跡を中心とした城の調査が主体であったが、今後は川港や城の周辺施設等、関連した施設にも眼を向けねばならない。本書の成果をもとに、更なる調査研究を継続していく必要がある。

## 【参考・引用文献】

### 《論文等》

- 青木勝士「肥後菊池氏の守護町「限府」の成立」『熊本史学』第72・73合併号 熊本史学会 1996
- 阿蘇品保夫「菊池一族史の再検討」「乱世を駆けた武士たち」熊本歴史叢書3 熊本日日新聞社 2003
- 阿南 亨「肥後國菊池における中世城館の再検討」「史学論叢」第44号 別府大学史学研究会 2014
- 阿南 亨「所謂「菊池十八外城」に関する諸問題」「肥後考古」第19号 肥後考古学会 2014
- 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会 1982
- 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会 1982
- 斎藤慎一「中世武士の城」吉川弘文館 2006
- 竹井英文「南北朝～戦国前期の「陣」について」東北学院大学論集「歴史と文化」第55号 2017
- 中井 均「中世の居館・寺そして村落一西国を中心としてー」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991
- 服部英雄「河原ノ者・非人・秀吉」山川出版社 2012
- 松岡 進「中世城郭の繩張と空間 土の城が語るもの」吉川弘文館 2015
- 美濃口雅朗「熊本県における中世前期の土師器について」「中近世土器の基礎研究X」日本中世土器研究会 1994
- 宮武正登「「陣」を再考する一武家社会下の仮設要塞の実態ー」「歴博」No.114 国立歴史民俗博物館 20
- 森田 勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会 1982
- 山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせてー」「九州上代文化論集」乙益重隆先生古稀記念論集刊行会 1990

### 《報告書・資料等》

- 菊池市史編さん委員会編『菊池市史』上巻 1982
- 熊本県教育委員会編『限府土井ノ外遺跡』熊本県埋蔵文化財発掘調査報告第248集 2009
- 熊本県文化財保護協会編『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 1978
- 渋江公正『菊池風土記』「肥後文献叢書」第五巻1910
- 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』史料編第二巻 1993
- 瀬野 精一郎編『南北朝遺文』九州編第一・三・五巻 東京堂出版
- 竹内理三・花岡興輝・杉本尚雄・工藤敬一編『熊本県史料』中世編第四・五
- 大宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡X V 陶磁器分類編』太宰府市の文化財 第49集 2000
- 森本一瑞纂（水島貫之校補）『肥後國誌』卷之六 1916

### 《脚注》

- 註1) 坂口金次郎氏のご示唆による。
- 註2) 近江秀俊氏のご示唆による。
- 註3) 服部2012。
- 註4) 「陣の方がより一過性の使用を前提としたことを漠然と想像するのみ」宮武2002。
- 註5) 竹井2017。



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 1 掘削状況(北東→南西)



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 1 遺物集中箇所



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 2 (北東→南西)



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 2 1号溝検出状況



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 3 遺構検出状況(南西→北東)



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 3 遺構検出状況



平成27年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 4  
2号溝検出状況(南→北)



平成23年度 菊之城跡確認調査 トレンチ 3 遺構検出状況



平成29年度 關府城下遺跡確認調査 トレンチ 9 溝状遺構検出状況



平成29年度 熊本城下遺跡確認調査 トレンチ3 ピット検出状況



平成29年度 熊本城下遺跡確認調査 井戸



平成28年度 熊本城下遺跡(熊本県北広域本部敷地内)確認調査  
トレンチ1 溝状遺構検出状況(熊本県教育委員会提供)



平成28年度 熊本城下遺跡確認調査(熊本県北広域本部敷地内)  
トレンチ2 溝状遺構、ピット検出状況(熊本県教育委員会提供)



平成29年度 熊本城下遺跡確認調査 井戸デジタル画像



2



3



4



5



7



8



9



18



19





54



57



58



59



60



61



63



69



70



71



74



77



79



80



81



82



84



89



90



91



96



97



98



99



100



101



103



105



106



107



108



113



114



115



116



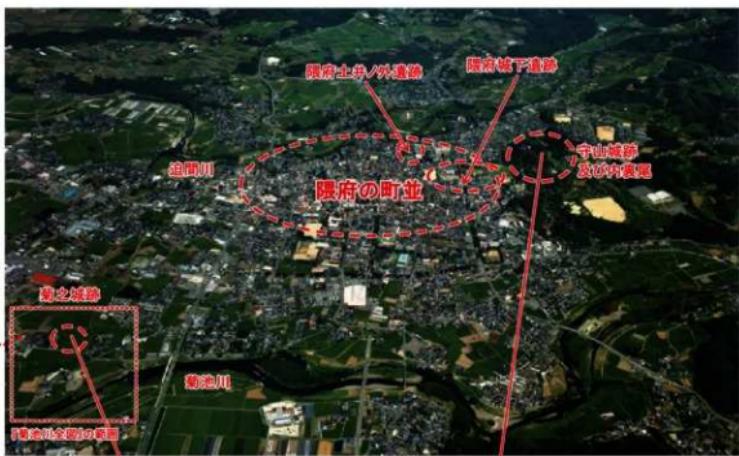
116



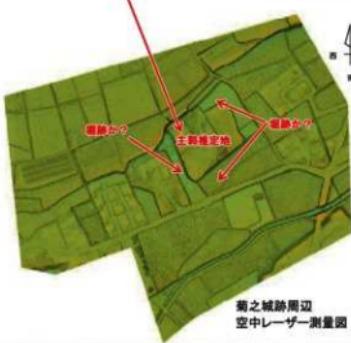
平成28年度頃府城下遺跡(熊本県北広域本部敷地内)確認調査  
トレンチ1 出土遺物 (熊本県教育委員会提供)



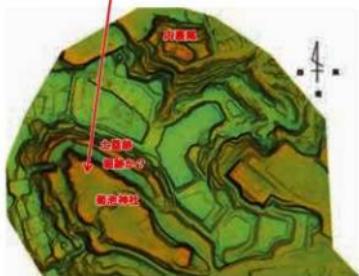
平成28年度頃府城下遺跡確認調査(熊本県北広域本部敷地内)  
トレンチ2 出土遺物 (熊本県教育委員会提供)



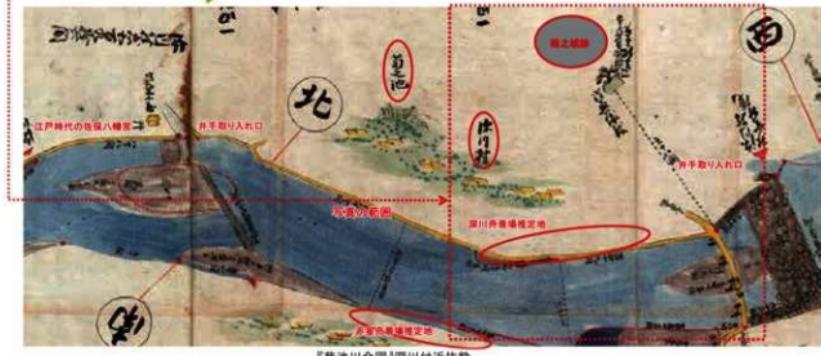
菊池市遠景(南→北)



菊之城跡周辺  
空中レーザー測量図



守山城跡周辺空中レーザー測量図



『菊池川全図』深川付近抜粋

## 報告書抄録

ふりがな	ちゅうせい あくないじゆでく かんれいせきくとん かくにんちょうりや みのよほうこじしょ
書名	中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書
副書名	「菊之城跡」「守山城跡及び内裏尾」「隈府城下道路」
シリーズ名	菊池市文化財調査報告
シリーズ番号	第10集
編著者名	坂本忠昭 西住欣一郎 北原美和子 阿南亨
編集機関	菊池市教育委員会
所在地	〒861-1392 熊本県菊池市隈府888番地 TEL 0968-25-7232
発行年月日	2020年3月28日

ふりがな 所収道路	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査対因
		市町村	農林水産局					
きくのじ わくとう 菊之城跡	熊本県菊池市北宮203他	菊池083	32度58分12秒	130度48分25秒	2012.3.15 2012.3.27	71m <sup>2</sup>	道路範囲確認	
さりやま じゆとく 守山城跡及び内裏尾	熊本県菊池市隈府城山1257		32度59分17秒	130度48分59秒	2015.9.9 ~ 2015.9.30	960m <sup>2</sup>		
けいふくじ わくとう 隈府城下道路	熊本県菊池市隈府城下1272-2		32度59分10秒	130度48分49秒	2019.4.11 ~ 2019.4.19	49.5m <sup>2</sup>	市民広場再整備地	

所収道路	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菊之城跡	城	中世	溝状遺構 土坑 ピット	土師器 須恵器 青磁 白磁 陶質系擂鉢 瓦器 風炉	城、もしくは居館と考えられる。
守山城跡及び内裏尾	城	中世	土塁		中世の土塁かどうかは不明。
隈府城下道路	包蔵地	中世	溝状遺構 ピット 井戸	土師器 須恵器	居館の廻路検出か?

要約	<p>菊之城跡、守山城跡は中世肥後国において、有力豪族であった菊池一族の本城と目されている。菊之城跡は確認調査により、溝状遺構、ピット等を検出し、土師器を中心として陶磁器等、13世紀代の遺物を多く出土し、城もしくは居館の存在が補強された。また周辺からは輸入陶磁器が表揚できること、今ものころ地名等、中世の掲示であることをうかがわせる。</p> <p>守山城跡は上界が現存しており、城跡であった可能性は大きい。</p> <p>隈府城下道路は守山城直下に所在し、確認調査で廻路と目される溝状遺構、井戸が検出され、100m超四方の規模を持つ居館がかつて存在した可能性がある。過去に調査された隈府土井ノ外道路でも廻路が見つかっており、隈府一帯には中世から町並みが整備されていたことがうかがえる。</p> <p>さらに中世文書からも当時の菊池の城の動向を知ることができる。</p>
----	---

菊池市文化財調査報告第10集  
中世菊池一族関連遺跡群  
確認調査概要報告書

「菊之城跡」

「守山城跡及び内裏尾」

「隈府城下遺跡」

---

令和2年3月

編集 発行 菊池市教育委員会

〒861-1392 熊本県菊池市隈府888番地

印刷 株式会社 トライ

〒861-0105 熊本県熊本市北区植木町味垣373-1

---